も日光停車場前に支店を設け客の送迎手荷物の運搬等を取扱ふ其の旅籠料は上等五十錢、中等三十五錢、並二十五錢ぐらゐにして晝食は十五錢乃至二十錢とす龍崖山小西別莊の上には新井ホテル、入町には日光ホテル、金谷ホテルあり此三家は重に外國人の宿泊に宛つるものにして日光ホテル一日の宿料二圓五十錢内外なりと云ふ又名物の重なるものは春慶塗、指物細工、諸漆器、曲物、挽物、獸皮、小鳥類、日光羊羹、紫蘇卷唐辛子、萱類、平素麵、栗山杓子等にして假橋の畔には日光山繪圖並に日光各勝地の寫眞等を鬻げる家多し

◉庚申山

庚申山は下野國上都賀郡の西境に屹立せる高山にして日光町よりは九里半を隔つ、此山に登らんとするには始終足尾銅山の輕便鐵道線路に沿ふて足尾町に至り足尾市街より上州街道を西に行くを六町許り其右傍に庚

申山表口と記せし一大石標を建つ、茲より右折し山麓までを百十四町（三里六町）とし一町毎に石標を建つ一丁目より六十三町目までは溪流に沿ふて登れども阪路左のみ嶮しからす夫より數町の間は山の中腹を攀づるものにて一歩を誤らば深谷に陷るの危險あり八十五町目以上は嶮愈々嶮を加へ登り登りて山麓に達す茲に僧坊ありて喫飯投宿ともに旅客の需めに應す夫より奥の院まで一里餘、山中には種々の奇勝名蹟ありて一々數へ盡し難けれども今重だちたるもの丶みを掲ぐれば坊の傍らより僅かに躋れば百間幕と名くる巖石あり又登れば萱石あり其先なる路傍に峙つものを櫓石と云ひ小飛瀑の傍らを過ぐれば女体石あり形ち女の陰具に似たり夫より登るに隨ひて奇巖怪石いよ〳〵多く往きゆきて一ノ門に抵る門は二柱石屹峙し其頂きに巨岩横はりて自から關門の形ちを爲すものにして頗る奇觀なり、茲を過ぎて右に向へは數丈の巖石溪間より屹立するありて之を梵字石と呼ぶ更に進めば富士見岩あり其傍ら螺石、蠟燭石等の

奇石多く且此處を以て巡覽所の西極とす是より途を東に轉すれは有名なる胎内寶あり第一を小胎内と云ひ洞穴小にして僅かに匍匐して潛るべく其次なるを大胎内と云ひ其濶さ六尺許り直立して通過すへく其穴は宛かも人工を施して開鑿したるもの丶如し此處より或は下り或は上り十餘町にして奥の院に達するなり、奥の院を下りて下向道を五六町辿れば東の妻といふ處に出つ左に男体山に矚み右に筑波、加波の翠巒を遠望し房總の海は虛無漂渺の間に在りて景致頗る爽快なり、茲より小笹を渡り降るを二十八町にして初めの僧坊に歸る、傳へて言ふ此山は昔し勝道上人一匹の白猿を東道として初めて分け入りし處にて爾來庚申山と稱へ來りしなりと、又此山へ登るには山巔飲料水に乏しければ必ず水、ブランデーの類を携ふへしとなり

◉川治温泉

下野國鹽谷郡藤原村字川治に在り鑛泉の性質は略ぼ鹽原温泉に同しく多少磐鹽の氣を含み打傷、創傷、疝氣、痔疾、冒病、肺病等に効驗ありと云ふ、東京より赴くには日光線路の今市停車場まて汽車に乘り同所より人力車にて往くへし停車場より川治まて里程六里半、人力車一人曳は四十錢内外、駕輿は八十錢、借馬ならは廿五錢内外にして道順は今市より北へ倉ヶ崎、大桑を經て高德に出て同村より鬼怒川の東岸に沿ひ大原、藤原を過ぎて高原に達し橋を渡れば即ち川治なり此橋を追欄橋と呼び川を男鹿川と云ふ男鹿川は高原の西にて鬼怒川と合す、温泉は追欄橋を渡り左方に折れて男鹿川の岸に下り立ちたる處より湧出し其の岸上に温泉宿近江屋(高橋鬼子三)あり母屋は後に温泉ヶ嶽を負ひ長屋は前に男鹿川を臨みて景色頗る幽雅なり、同家の宿泊料は上等一日二十五錢、中等二十錢、下等十五錢なれとも長屋を借りて手賄ひを爲さんとする人は席料道具料として一日上等五錢、中等四錢、下等三錢五厘を拂へば足れり亦

廉ならすや、此地より北一里半にして五十里湖に達し高原より東北三里餘にして湯本鹽原に到り得れとも鹽原道は頗る嶮惡にして尋常浴客は徒歩之を辿るに苦しむ程なりと云ふ

◉藤原温泉

前記の川治温泉に到る途中、今市を距る四里半の處に藤原温泉あり東に金山を負ひ西南に日光の連峰を望み鬼怒川は村の西を流れ土地高燥にして空氣清良なり、温泉は鬼怒川の東岸岩石の間より涌出し無色透明其の反應は弱亞兒加里性にして九十六度の温度を保つ、此の温泉は明治二年初めて發見せられ同十二年より浴場を開きしものにて温泉宿は幸屋（星猷治）の一軒、其の近傍には民家僅かに四五軒あるのみ、幸屋の宿料は上等一日二十五錢、中等二十錢、並十五錢にして座敷料は一日貸切六錢より十錢までの差あり又今市停車場より此地まで人力車賃二十五錢、駕

籠賃は四十五錢なり、藤原温泉場より鬼怒川の流れを隔てゝ對岸に瀧温泉あり藤原村の内に屬し一軒の温泉宿（大出某）あり河上に假橋を架して藤原と相往來し人家十戸許り多くは山業を主とし傍ら農を營み村民皆な質朴純良の風あり

◉鹽原温泉

風景の幽雅なると温泉の特効あるとに依りて近年俄かに其名を顯はし日本鐵道線の開通せし以來夏日浴客群集し其の繁昌殆ど他の温泉場を壓倒せんとするものは鹽原温泉なり鹽原温泉場は日本鐵道東北線路の西那須野停車場を距る西北五里、下野國鹽谷郡の北端鹽原山の麓に在り温泉場は上中下、鹽原及び湯本鹽原の四ヶ村に散在するが中にも中、下鹽原に温泉最も多くして其地の小名を大網、福渡戸、鹽竈、鹽ノ湯、畑下戸、門前、古町等と云ふ、停車場より大網まで一人曳人力車賃四十錢、乘合馬車

一人前三十錢先づ人力車に乘りて西北に向へば停車場を離るゝ十町餘りにして三島村に達す民家五六十戸簷を並べ其中に故三島警視總監の別莊あり此地は昔しの那須野ヶ原にして飛禽走獸すら其跡を絶ちし處なりしに故三島君は世の批難を事ともせず莫大の費用を募りて茲に此の新道を開きしかば鹽原路の如きは昔し左靱など云へる名高き難處ありしも今は自由に車馬を通じ却て旅客の爲めに喜ばる利害の相伴ふ所まことに測り知るべからざるものあり恁て此の原野中の道を過ぎ行くこと二里餘りにして關谷村に到る茲より鹽原までの道路は屈曲して山の腰を旋り屏風に似たる縣崖、壘壁に似たる磐石の下をよぎり其間或は溪流を送り或は瀑布を迎へ景色は一町毎に新たにして途に飽くことを知らず漸く大網に近づけば途に見返り橋あり其長さ二十間橋下に見返りの瀧といへるありて宛然水晶の簾を懸けたるが如し、橋を渡りて一ッの嶮しき坂を下れば大網に達す即ち鹽原の入口なり大網には温泉宿僅かに佐藤久作の一軒あるのみなれど家居はさのみ見苦しからず茲を過ぎて猶ほ行くこと八町ばかりにして洞門あり長さ十七間其の入口に架するを寒凉橋と云ふ此橋の上流に小瀧あり未だ其名を知らざれども水音は宛も天女の樂を奏するに異ならずとて態々見に行く者も多し偖洞門を潛りて十町餘り行けば即ち福渡戸にして此地は戸數二十戸ばかり温泉宿は滿壽屋（臼井吉右衛門）松屋（田代尚吉）を最上とし其他玉屋（田代辨治）丸屋（大塚倉吉）叶屋（磯兵吾）磯屋（磯長作）山形屋（磯兵三郎）吉野屋（磯吉平）陬口屋（田代金平）槇野屋（田代久米平）等にして毎戸軒を並べ孰れも二層又は三層の樓を搆ふ、温泉は箒川の向ふなる岩窟の間より湧出するものを岩の湯と云ひ其他不動の湯、冷の湯、藥研の湯等の湧口ありて各旅館は皆な此温泉を樋にて導き館内に内湯の設けあり、福渡戸を出で行くこと一二町にして右に天狗岩を望み左に野立石を觀るを得、野立石は高サ二丈餘面積百坪ばかりにして其面の平かなること鏡の如く茲に葭簀張捨て床几を設けて客を憩はしむ

箒川の流れは岩下に漲りて白河は銀の珠を散らすかと疑はれ目の届く限りは怪しの岩石其處此處に起伏して奇景云はん方なし軈て茲を出れば路の傍らに古き碑ありて里人之を高尾塚と呼ぶ又少しく離れて一樓屋の見ゆるは即ち品川子爵の別莊念佛庵なり猶ほ歩を進むれば忽ちにして畑下戸に達し又行くを數十歩にして南崖に吉井の瀧を望む個は前の宮内次官吉井伯爵の深く愛せられし瀑布にして直下十七八丈ばかり岸を傳ひ屈曲して落ち來る樣は浴人の腸を洗ふに足るべき奇觀なり、畑下戸には温泉宿佐野屋（君島豐平）紙屋（阪内仁三郎）大和屋（阪内平六）伊勢屋（阪内榮三郎）井桁屋（阪内重太）の五軒あり畑下戸を斜に見て過れば旅店二十戸ばかり簷を並べて一市街を爲せる處に出づ是れ即ち門前と稱ふる温泉場にして温泉宿は孰れも二階三階の高樓を築き互ひに繁昌を競ふが中にも宮田屋（深尾七三郎）を最とし松本屋（渡邊牢三郎）山口屋（櫻井千代松）之に次ぎ福田屋（手塚子之吉）疊屋（渡邊長吉）關東屋（渡邊久吉）又之に亞ぐ

茲より町續きの一橋を渡れば古町にして門前と古町とは宛から一市街に異ならず温泉宿も亦此地に最も多くして其數十一二軒ばかり就中上ノ會津屋（君島峰吉）米屋（細井久平）萬屋（君島峯治）等を上等の部とし其他中ノ會津屋（君島峯吉）永樂屋（君島豐三郎）稻屋（君島兼吉）那須屋（渡邊宇太吉）常陸屋（君島勝馬）鍛治屋（君島兵太）角屋（君島由三郎）明賀屋（君島捨吉）銚子屋（君島直吉）等あり此の旅店より少しく離れたる箒川の岸に楓川樓（松井長兵衛）と云ふ料理屋兼業の旅館あり家廣くして且眺望に富み鹽原中屈指の旅亭なり此處より會津道を行くを六七町にして壯麗なる別業を山の小高き處に望む是れ即ち眞田幸民氏の所有にしてその邊りに一ッの洞窟あり深さ四五町里人呼んで源三穴といふ又少しく離れて樹木鬱蒼たる處に八幡神社あり境内に生茂りたる三株の古杉は周圍共に四丈に過ぎ枝は垂れて地を掠めんとし其の幾百年を經たるものなるやを知らず俗に之れを倒杉と云ふとぞ、茲より後戻りして鹽釜に到り鹽湧橋を

渡りて斜めに溪路を行くこと十町餘にして鹽の湯に出づ旅亭は明賀屋（君島五郎）玉屋（君島淺吉）柏屋（阪内直吉）三軒あり其中にて明賀屋は家最も手廣にして遙かに他の二軒に優れり温泉は谷を下りたる處より湧出し茲より水涯に沿ふて廿町ばかりも登り行けば飛泉の絶壁に懸るを見るべし其一を雷霆の瀧、其二を霹靂の瀧、其三を咆哮の瀧、其四を素練の瀧と呼びて孰れも距離相遠からず其瀧は皆一顧の價あれども瀑名は六ツかしき漢語のみにして里人の耳に入り易からず爲めに人に記憶せられざるを憾みとす個は悪詩など作るにせ風流者が俗語の名にては詩中の材料と爲し難き爲め故らにかゝる名を負はせしには非ざる乎余は爲めに一笑す又門前より徑路を登ること八町ばかりにして須巻に到るを得べし須巻には六條の湯瀧を懸くるをもつて一名を瀧の湯とも云ふとぞ、古町より西二里の山中に一温泉場ありて之を新湯と云ひ藤屋（渡邊伊三郎）大黒屋（大塚金藏）君島屋（君島久伸）等六七軒の宿屋あれども之を門前古町等の温

泉宿に比すれば大に劣れり今は鹽原各温泉宿一定の宿泊料を記せば旅籠料一等一日五十錢、二等四十錢、三等三十錢、並二十錢にして貸切の席料は八疊一室日二十錢、六疊同じく十五錢、合宿として用ふる分は一人に付一日四錢、賄料は一飯四錢より十五錢迄なりとぞ又已に述べたる如く近傍瀑布あり岩石あり一々其名を存すれども煩はしければ茲には掲げず若し其勝を探らんとする人々は先づ温泉宿に投じ浴後散歩かた〳〵巡覽するを善しとす

此地も亦日光山と同じく紅葉の名所にして秋老い霜深き頃は滿山錦繡を織出し見返り橋、野立石のほとり殊に絶景なり其盛りは概ね毎年十月下旬より十一月初旬までの間に在りて東京瀧の川に紅葉を染出す頃鹽原にては既に色あせ葉落ちて見處少なし故に此地紅葉の盛りを賞せんとならば東京にて菊のそろ〳〵咲初めし頃を計りて出立すべし又晩春の候には躑躅の花到る處に咲き亂れて秋の紅葉にも優れる眺めなれど是れも亦知

る人稀なり而して温泉宿の閑静にして客に取りて便利なるは却て春秋の二季に在り眞に鹽原の風景を愛するみやび雄は夏季の雑沓を避け此暑からず寒からぬ時候を計りて筇を曳くも亦妙ならむ

◉那須温泉

那須七湯は下野國那須郡那須ヶ嶽の周圍にありて其の温泉場を湯本、高雄股、辨天、北、大丸、三斗小屋、板室の七ヶ所とす故に七湯の名あり、那須ヶ嶽は五峰並列して茶臼山最も高く直立六千四百尺且噴火山にして常に硫烟を吐く之に連なる高峰を男鹿、佐飛、箒根、鹽原、高原の五山とす連峰皆南向して高原の北を圍み西に亘てり二荒山に接す、温泉は實に此山中の凹處より湧出し近きを湯本とし其最も遠きを三斗小屋とす、旅客は黒磯にて日本鐵道の東北線路を下り（東京より黒磯まで下等汽車賃一圓五錢）北に進みて那珂川の假橋を渡り高久より左折し一里半にして松子に

着す茲より十六町にして田代に至り又二十町にして廣谷地に至る此處より道は漸々に登り深林溪谷の間を過ぎ二里にして湯本に達す黒磯停車場より湯本までの里程四里二十町、二人曳人力車賃は七十錢内外にして凡そ二時三四十分間にて湯本に着す、湯本は那須村に屬し東北に那須ヶ嶽を遶らし西南は遠く開けて眺望稍や快濶、戸數は三十戸餘りにして温泉宿は小松屋、河内屋、和泉屋、中藤屋、松川屋、松屋、橘屋、清水屋の八軒あり温泉宿は孰れも純然たるコケラ葺の日本家屋にして曾て西洋めきたるペンキ塗、白亜造りの家を見ざりしか近年鹽原温泉の大に繁昌を増せしを見て此地も隱然競爭を試み新築設計中のものもありと云ふ去れど此地の長する所は風色の明媚なるにあらず家屋の宏壯なるに非ずして其の温泉の特効あると宿泊料の低廉なるとにあり故に各温泉宿は競ふて旅客滯在の費用を廉にし一日止宿料十五錢内外にて客を留むる家あり之を鹽原、日光等に比すれば亦至廉と謂ふべし、温泉宿の中にて内湯あるもの

は小松屋、河内屋、松川屋の三軒にして湯口は那須ヶ嶽の山麓湯川の東岸より湧出するものを採り之を浴槽に導く其の泉質は酸性泉にして略ぼ上州の草津温泉と同しく無色透明なれとも硫黄の臭ひを帶ひ旦強酸鐵性味を有し其の効能は胎毒、瘡毒、僂麻質私、脚氣、痳病、疥癬、其他慢性皮膚病等に宜しと云ふ、茲に入浴者に向ひて特に注意を促すへき事あり那須温泉は以上記載せし如く酸性強きが爲めに屢々入浴する時は浴疹を發し頭痛眩暈等を釀す事あり、温泉に浸したる浴衣手拭の類を日光に晒す時はボロ〳〵に裂くるをあり故に宜しく陰乾を爲すへし、金屬は酸化し易ければ大切なる品は行李に秘め置と指環など箝めたる儘入浴すへからす白粉も金屬ゆゑ婦人化粧の儘入浴する時は忽ち黑色に變する事あり是等は入浴者の豫しめ心得置へき事なり、湯本より十二町にして高雄股温泉あり是より温泉神社に賽し行くを數町にして有名なる殺生石あり湯本より途を北に取り進むを三十町にして辨天の温泉あり地は峨々たる岩

層を以て三方を繞らし其傍ら辨財天を祭れる岩窟あり辨天の名是より起る、辨財天より東十八町にして北温泉に到る此地は四方山岳圍繞して檑鉢の底の如く日光は午前九時より午後三時まで映射するのみにして晝猶ほ暗く氣候は湯本に比すれば稍や清涼を覺ゆ、茲より西に向ひ嶮道を攀ちて行くを十五町にして大丸温泉に到る此地にも二三の温泉宿ありて泉源は岩石の間より湧出し其の温度は華氏の百度より百五十度に至り頗る熱し茲より又新道を辿り喘ぎ〳〵登るを一里三十町にして三斗小屋に達す其道は茶臼嶽の北面中腹をよぎるを以て仰いで噴火の轟々たるを見るべく俯して急流の轟々たるを臨むべく道頗る嶮しと雖も亦徒歩疲るゝを覺ゑず、三斗小屋には温泉宿大黑屋、三春屋、生島屋、佐野屋の四軒あり此地の温泉も亦多量の硫酸を含み温度は華氏の百二十度内外にして其の効能は略ぼ湯本の温泉に同じ、三斗小屋より茶臼山の西南を迂回し四里半にして板室温泉に出づ、板室は高林村に屬し西北東の三方は那須ヶ

嶽の餘脈聳然として屏立し南方稍や開けて遠く那須野の原を望む、戸數十餘軒皆な温泉湯口の傍らにあり而して温泉宿は大黒屋、和泉屋、一井屋、鹽澤屋、角屋、江戸屋、梅屋、伊勢屋、米屋、若松屋等の十軒あり夏日は浴客多しと雖も冬は客を絶ち各温泉宿も皆戸を鎖して村里に歸るを常とす、茲より三里餘にして湯本に歸り又板室より南へ那珂川を渡り油井、細竹、岩崎、龜山、小結等を過ぎて黒磯停車場に出るの道あり（板室より黒磯まで四里十八町）是を那須の七湯廻りと云ふ

◉黒田原温泉

黒田原停車場（上野より下等汽車賃壹圓九錢、を出る數十歩鐵道線路の左側に新設の黒田原温泉あり、是は茲より直徑四里餘を隔てたる那須の大丸、朝日の二泉源より樋を伏せて温泉を引きたるものにて温度は攝氏の四十五六度を保ち浴場は黒田原温泉株式會社（資本金二萬五千圓）に

屬す、浴室は上等（入浴料二錢）下等（同しく五厘）の二槽に區別し家屋は目下假建なれども本年夏季までには尚ほ一二の浴室を增築するの見込みなりと聞きぬ、其の近傍には若松屋、松野屋、木山田、大鹽等七八軒の旅店あり皆昨年の新築に係り尚ほ商家、別莊等の建築なかばなるもの多く今ま一二年を經ば道路井然たる一市街を爲すに至るべし、温泉は宿屋より通ひて入浴する仕組なれども追ては旅店中に内湯を設くるものもあるべく其上浴客逗留中の必要品を鬻くべき商家などの漸々建ち揃ひなば此地も亦年を逐ふて繁昌すべし、前記旅店の内若松屋は料理屋兼業にて宿料は一泊三十錢なり、素より海魚には乏しき處なれど同家の鯉こく、鮒の蒲燒などは稍や都人士の口に適するものなりとぞ

◉筑波山（筑波神社）

藤原那須等の温泉を一巡したる旅客は一たび小山驛に立戻り茲より水戸

鐵道線路に據りて陸常二三の避暑地を見物するも可ならん而して茨城縣下に於て第一に其の案内を爲す可きは筑波山なり、筑波山は富士と相對する關東屈指の名山にして地は筑波郡に屬し麓は眞壁、新治の二郡に跨がり峰尖二つに分れて西を男體、東を女體と云ふ遠く二峰を望めば殆と馬耳の相双へるか如し、此靈山に登らんとするには小山驛より水戸鐵道の岩瀬停車場に到り同處より眞壁まで人力車を驅り夫より案内者を雇ひの徒歩登山すへし小山より岩瀬まで下等汽車貸二十二錢（東京より岩瀬まで八十錢）岩瀬より眞壁まで凡そ二里半、人力車賃は二十五錢内外にして眞壁には龜屋外二三の旅亭あり、先つ眞壁に發足し平原を辿り行くを南一里餘にして羽鳥村あり茲より道は次第々々に登り廿五町にして出村に達し又五六町にして藥師堂の傍らに出つ茲よりは道は深林の中に入りて愈々嶮しけれとも行くに隨つて眼界忽ち開け仰ぎ見れは男體の峯は頭上に聳ゑ眺みれば葺穂、加波の二山は足下より起りて筑波と相對峙し其

の絶景云はん方なし猶ほ登るを數町にして石の華居あり茲より筑波郡に屬し絶頂男體山まて二十五町と云ふ、既にして男體山の頂きに達すれば筑波山神社の本社末社ありて本社を男體の祠と云ふ伊弉諾尊を祭る、是より社内を下り鐵鎖を便りとして九折の危道をたとり御幸の原を過ぎ又登るを半里にして女體山に到る茲にも亦一社ありて之を女體の祠と云ふ（伊弉冊尊を祭る）此處より遠望すれば常陸の浦々は眼下に集まり西には富嶽を仰ぎ南には房總の遠山を望み其の風色文すへからす是より下り道愈々峻嶮にして途中北斗石、大黒石、雷神の窟等の傍らを過ぎ戻り岩、歡喜天の社等をよきり二十餘町にして麓に着す、眞壁より女體山まて里程三里と稱すれとも道嶮しければ五六里も歩みたる心地すへし、元來此山に登るは南麓筑波町よりするを本道として其道稍や廣くして嶮惡ならず羽鳥村よりするは裏道なるを以て稍や嶮峻を極むと、又山上山下名所舊跡頗る多くして此山を詠める古歌なども古來其の幾百なるを知らざれ

ども煩を厭ひて悉く省略せり

◉常磐公園

常磐公園は日本三公園の一に數へられ水戸市の西南二十町常磐村字神崎に在り（東京より水戸まで下等瀘車賃一圓八錢）停車場より人力車賃八錢を投ずれば直ちに公園内常磐神社の華表前に到る、此の公園は舊偕樂園の敷地にして坪數凡そ三萬坪、天保十三年水戸源烈公此地を卜して遊息所と定め園を拓き樓を設け亭を好文亭と云ひ樓を樂壽樓と云ひ庵を阿陋庵と云ふ園中梅樹數千を植ゑ花候に到れば雅人と俗人とを問はず老若男女群集して其色ゑ愛し其香を賞す地は鐵道線路より高さを數十尺、南に仙波湖を望み又櫻山と相對して風景絶佳一たび水戸に到る者にして此園に遊ばざるは殆ど希なり其の東隣に常盤神社あり水戸舊藩主義公（光圀）烈公（齊昭）を合祀する社にして明治六年の創立に係り同十五年別格

官幣社に列せらる祠宇宏麗ならずと雖も賽人常に絶ゆるをなし社の傍らに神樂堂あり中に烈公が造る所の陣太鼓を納む太鼓の徑四尺五寸胴の周圍一丈尺五寸其の長さ六尺二寸左右に烈公自筆の銘あり又烈公が鑄造せし大砲一門あり社地より下りて表華表に出る阪道の傍らには二三の割烹店、温泉宿あり就中津の國屋最も名高し、因に記す水戸市は茨城縣廳所在の地にして人家四千二百、人口一萬七千餘、市街百十六北に那珂川を控へ南に仙波湖を擁し舊水戸城山其の中央に在り西部を上市と云ひ東部を下市と云ふ共に人家櫛比し稍や繁盛を極む藩政の時は下市に以て本町とせしが今は上市を以て本町となし茨城縣廳、裁判所、郡役所、師範學校、中學校、大村區署、郵便電信局、國立銀行、共立病院、新聞社等皆な上市に在り又旅人宿は上市泉町の鈴木屋（鈴木庄兵衛）麹屋（遠西信守）伊勢屋（平山彦六）南町の芝田屋（永井彌七郎）森川屋（森義智）等を上等の部とし停車場前にも亦鈴木屋支店外二三の旅店あり又料理店泉町の垂楊亭を

最上とす、鈴木屋宿料は一泊三十錢以上、停車場より同家までの人力車賃五錢なり

◉大洗海水浴

常陸有名の海水浴場にして水戸を距る東三里、東茨城郡磯濱村の海濱に在り此地に赴かんとするには水戸上市三ノ丸杉山通りの川岸より那珂川通ひの立舟に搭じて那珂川を下り那珂港の對岸字祝町に上陸し茲より二十町の海濱を歩みて大洗に到るを善しとす水戸より祝町まで一艘借切の舟賃三十錢、乘合同じく四錢五厘、水路三里なれども順風の時には僅かに一時間餘にして達する事わり、大洗は海中に斗出するを三町餘、海濱には奇岩突兀として起伏し岬上には老松蓊鬱として繁茂し海中には多くの鮑を生ず是れ此地の名物なり、旅店兼割烹店は魚來庵、金波樓、小林、杵屋等の數軒にして就中魚來、金波を最とす家は海濱に沿ふて建築し欄

に倚りて怒濤の岸を嚙むを見るべく又漁舟の遠く波間に隱見するを望むべし魚來庵定めの宿料は並二十五錢にして樓下に潮水の温浴場あり磯濱村は全村悉く漁を以て業とするが故に鮮魚は殊に夥多しくして其價も亦廉なり岬上數百の石階を登りたる處に別格官幣社大洗磯前神社ありて大已貴、少彦名の二神を祭れり又其の背後を子の日原といふとゞ白砂青松の間遙かに茫々たる鹿島灘を望み山色海光共に佳絶眞に茨城縣下第一の勝地なりとす、歸路は途を磯濱村の方に取り所謂磯濱街道を歩みつゝ水戸下市に出でゝ停車場に達すべし其の途中は處々五六の民家あるのみにて一の村落を爲せし處なければ足弱の人は最初より磯濱にて人力車を雇ふ方宜しからん（磯濱より水戸まで人力車賃三十五錢、二時間にして達す）、途中にては人力車を雇ふを難ければなり

◉湯本温泉（磐城國）

水戸より猶ほ北に向ひては今春開通せし常磐鐵道あり水戸より磐城國磐前郡平町まで距離五十八哩四十三鎖にして其の途中十四ヶ所の停車場を設く且此の線路は概ね海岸に接して敷設せられたれば行く車窓より靑松白沙ゝ隔てゝ渺々たる太平洋を望み得べく其の景色の佳なる敢て東海鐵道に讓らず又沿道各處に名所舊跡多くして平潟の海濱、勿來の舊關の如きは其冠たるものなる可し去れど筆の都合に依りて是等の記事は他日に讓りて玆には湯本溫泉の案内のみを掲げん

水戸より常磐線に移りて北行すれば三時間にして第十二次の停車場なる湯本に達す、場を出でゝ東北の方七八町を行けば人家二百戸ばかり簷を連ねて一市街を爲すあり是れを湯本村となす、湯本は一に三函溫泉と稱し村を距る壹里餘の山上に函の狀を爲せる石三個あり泉源爰より出でゝ市街に分派せりと古老は言傳へけるとぞ、今は村内各處より鑛泉涌出し浴舍中には之を室内に引きて内湯と爲したるもあり其の泉質は鹽類泉に屬し溫度は華氏の百二十七八度ばかりにして疥癬、痔疾、僂麻質斯等に効能あり、溫泉宿は新瀧樓を始め二十餘戸にして皆通常の宿屋を兼ね、

夏季は平町其他近鄕より來浴する者頗る多く且其の近傍には磐城炭の炭坑あるをもて四時旅客の絶ゆるを無しと云ふ、常磐線の既に開通せし今日以後は年を逐ふて繁盛に赴くなるべし

◉太平山

水戸鐵道近傍の避暑地を遊覽し終らば更に旅客を兩毛鐵道の方に導き參らせんに小山驛より西し栃木に到れば西に太平山あり兩毛鐵道線路の近傍避暑納涼に宜しき處多きが中に太平山は恐らく最上の土地なるべし同山は元治元年水戸浪士なる天狗連が楯籠りしより名高く位置は下野國下都賀郡栃木町大字平井に在り栃木停車場より西の方凡そ一里にして其麓に達す道路は昨春新たに開鑿せしものなれば坦々腕車を驅るに宜しく賃金八錢を費さば二十四五分間にして山下に到着し得べし既にして山に近づけば溪水潺々として俗塵を洗ひ木の間漏れ來る涼風には夏を忘るゝの

思ひわり麓より石段數百階を登れば神殿ありて三光神社といふ昔しは慈覺大師の草創せし寺院なりしが今は社となれり社殿より西南に歩み行くこと二町許りの處に太平公園あり古松老柏枝を交へて日光を遮り遙かに東南を望めば數十里の廣原は一碧雲と連なり常總の山、甲武の峯は層々屏風を立て環らしたるが如く東に筑波山あり西に富士山あり名にし負ふ坂東太郎は蜿蜒として平原に蟠まり其の前面には赤麻沼の鏡よりも澄み渡れるを觀るべし更に東の方に歩すること二町にして虛空藏堂の前に出づ栃木市街は眼下樹木の間に隱見して風色の新なるを覺ゆ、山上に茶亭十戸ばかりも有りて孰れも旅舍を兼ね一泊料は廿五錢以内、下宿料は一ヶ月五圓以内、素より鮮魚には乏しけれども一般の食品は左のみ高からねば近來納涼の客又は脚氣患者の此山に逗留する者多し、汽車賃は東京より栃木まで下等六十六錢、上野の第一列車（午前六時四十分發）に乘込み小山にて滊車を乘換ふれば午前九時四十分栃木に達す

◉岩船山

小山驛より東へ第三の停車場なる岩舟驛の傍らに岩船山あり山容船を逆まにしたるに似たるを以て此名あり緣起に云ふ當山の開闢は人皇四十九代光仁天皇の寶龜年中伯耆の弘誓坊明願といふ僧靈夢に感じて當山に來り生身の地藏菩薩を拜すとあり方今春秋の彼岸に大祭禮を執行ひ十里四方より來り詣づる者多くして頗る雜沓を極む山上松柏生ひ茂りて風景よし古歌に「薄くこく松原見にて下野や都賀山つゝさ雲晴れにけり」と詠みしは此處よりの景色なるべし、此山近年石材を產出す其質水に弱きも火に耐ゆるを妙なり、小山より岩船まで下等滊車賃二十錢

◉唐澤山（唐澤山神社）

兩毛鐵道線路の佐野停車場より東北二里弱唐澤山に唐澤山神社あり、此

山は實に田原藤太秀郷の古城趾にして同神社は秀郷卿の靈を祭り先年特旨を以て別格官幣社に列せられぬ、先づ佐野停車場にて列車を下り更に同所より葛生通ひの輕便鐵道に賴りて田沼に赴き同所より徒歩北に向へば幾ばくもなくして山道に差掛るべし是れ唐澤山の裏道なり、社殿は古への本丸跡に鎭し其他二ノ丸、三ノ丸、武者詰、引局、大炊ノ井等の舊趾を存す、又鏡岩、姥ヶ岩、重ね岩等の奇巖あり、伯爵佐野常民翁自ら秀郷の後胤なりと稱し古籍をあさり地理を鑑みて神社の經營に力を盡し更に壯麗なる社殿を再築せんと目下計畫中なりと聞く、山上の眺望は頗る開豁にして房總の山二毛の峯は皆四顧の間に在り且つ春は櫻花を觀るべく秋は蕈を狩るべく夏の避暑、冬の觀雪亦共に旅客の歡ぶ所なるべし、歸途は本道を下りて東し犬伏町を經て佐野公園に立寄り鐵道線路を横ぎれば直ちに佐野停車場に抵るを得べし、東京上野より佐野まで滊車賃は下等七十二錢、佐野より田沼まで同じく六錢、若し佐野より唐澤山麓

まで人力車を雇ふとも其の賃金は二十錢の上に出でず

◉甲子温泉

兩毛鐵道に據りて下野の避暑地を巡遊したる後は更に小山驛に立戻り日本鐵道會社の東北線を北行して二三の温泉地を訪ふべし、小山より第十次の停車場なる白河に到れば其西に甲子温泉あり、其地は下野の那須三斗小屋温泉場を距る直徑二里半許り、磐城國西白河郡の西端甲子山の半腹に位し有名なる阿武隈川の上流に在りて白河を距る五里廿五町なり、途中白河を距る二里折口といふ處より阪路の傾斜稍や嶮を加へまた二里にして高清水に至る此處に軍馬育生所ありて千餘頭の馬を養ふ是より一里廿五町にして温泉場に達す是を甲子新道となす、土地高燥空氣清爽二方には大倉山、庭鳥山、朝日嶽の連峯圍繞し阿武隈川の源流は西南より來りて温泉場の前を貫流す温泉は微亞兒加里性にして温度は華氏の百二

十度を保ち涌口四ヶ所之を本湯、新湯、湯神の湯、瀧の湯と云ひ甲子は其の總稱なり、温泉宿は菊地元壽の一軒なれども母屋には壽康樓と號する三層の高樓を設け道を隔てゝ向ひに二階建ちの別莊を新築し客室の建坪都て二百五十坪許り一軒にして殆ど他の小温泉宿三四軒に匹敵す、通常の旅籠料は一日晝食共に三十錢、三十五錢の二級ありて其他上等は客の好みに應ず又自賄ひと云ふは宿屋に薪水の勞を托し別に席料、蒲團料を拂ふものにして之を此邊にて木賃と稱し其の費用は一ヶ月一圓八十錢ぐらゐなり、地は斯く偏僻なるが爲め牛肉、海魚類には乏しけれど阿武隈の上流には鮎、ヤマメ、赤腹の類を產し山には蕗、松蕈、岩茸等を生ず又温泉の近傍瀑布頗る多く之を八十八瀧と稱す其の著名なるものを擧ぐれは大熊雄瀧は高さ二十丈、同く雌瀧は二十六丈、衣紋の瀧は十二丈素麵の瀧は二十五丈にして温泉場よりの距離は素麵の瀧へ一里、雄瀧へ三十町、雌瀧へ廿五町、衣紋の瀧へ六町なり、又白河より此地まで人力

賃片道八十錢、借馬賃は四十五錢、人力車ならば三時間にして達すべし

◉湯本温泉

湯本温泉は磐城國岩瀨郡湯本村に在り白河を距る西北九里、地は布引山と白河布引との間に挾まり鶴沼川の清流は東より西に貫流し南北には田野數十町歩を擁し風色明媚、土地閑靜晩春には桃李節を同うして開き鶯鵑一時に鳴く、温泉々質は鹽類泉にして温度は華氏の百十度内外、村の中央に巨大なる浴槽を設けて共同浴場とし旅店にては樋にて温泉を導き家毎に内湯の設けあり旅舍は湯口屋、星野屋、角屋其他三軒皆二階造りの巨屋にして客室數十を有す素より田舍の事とて建築壯麗ならず器具も亦雅潔なるに非らされども費用は頗る低廉にして客より旅籠にて止宿せんことを求むるも之に應ぜず豫じめ價を定め客の指囑に依りて炊事を請合ふを常とす其の割合は白米一升九錢内外、席料一人に付五錢五厘、蒲

團一枚二錢五厘、炭一箱三錢等なり、話説前に立戻りて白河よりの道順を記せば白河より眞名子まで三里、眞名子より羽鳥まで三里此間に鐵名阪といふ峻阪ありて乘車の客は十四五町の間車より下りて徒歩せざるを得ず又羽鳥より湯本まで三里にして此間には數部落あり道は鐵名阪を除くの外は格別嶮惡ならずして車馬共に通じ白河より湯本までの人力車賃一圓二十錢内外、借馬賃は仝じく五十錢、眞名子、羽鳥等にて自在繼換ふることを得るなり

◉白河の關舊趾

能因法師の「都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の關」と詠めり し白河の關の古跡は白河停車場より南東の方三里ばかり西白河郡古關村字旗宿といふ處に在り、其地は左右ともに峯うち續きて谷を爲し其間に狹き山道あり是れ古への奥州街道にして傍らに白河神社といふがあり如

何なる神を祭れるにや詳かに知る由なけれど木立生茂り祠はさゝやかなれども最と神さびて見ゆ、其の境内がやがて關の跡なりとて社前に一つの碑をぞ立てたる表には寛政十二年松平定信建之とゑり付け裏にはかゝる古跡の世に埋れて終には人に知られずなり行かんをを惜み其しるしばかりに此碑を建てゝ後の世に傳へんとすと漢字百餘字もて記しつけたり、傍らにさゝやかなる流れありて之を白河と云ひ又數十歩を隔てたる處に一つの石卒都婆あり是はむかし藤原清衡が中尊寺を建つる時一町ごとに設けたる卒都婆の一なるべしなど言ふ人もあれど確かならず、白河停車場より茲までの道は隘きが上に嶮くて車の通ふには便りあしければ此の古跡見まはしき人は一圓ばかりの金をとう出て白河町より往復りとも駕輿を雇ふこそ好からめ

◉南湖（附り搦山）

白河停車場の南二十町許り字大沼に一池沼あり南湖といふ松平定信（樂翁公）曾て白河に城主たりし頃枯蘆を刈取りて湖を浚開し湖畔の諸處に雅名を付し分ちて十七勝とす即ち關の海、共樂亭、鏡山、眞萩ケ浦、錦岡、松虫の原、常磐清水、松風の里、月待山、月見浦、下根島、御影島、千歳堤、小鹿山、有明崎、八聲村、千代ノ松原是れなり又別に十六景を撰び十七勝には各々和歌を題し十六景には詩を賦し之を石に刻して湖畔に建つ、湖は周回二十一町餘にして今は其地を公園とし遊人の或は舟を湖上に泛べ或は車を堤上に驅りて花を愛し月を賞する者多し、又南湖の東北大沼村大字大村阿武隈川の北岸に搦山あり結城宗廣の舊趾にして山上の岩壁に感忠銘あり、往て古へを弔するも亦可ならずや

◉安達ケ原古跡

二本松停車場（上野より下等瀛車賃壹圓五十二錢）より東の方十五町ば

かり岩代國安達郡大平村に安達ケ原黒塚の古跡あり、阿武隈川を渡りて大平村に入れば民家四五軒まばらに散在し其後の方に南無觀世音菩薩、南無阿彌陀佛等の文字をいくつと無く刻せる巨巖二ッを積重ね其下に窟あり古へ鬼の棲みし跡なりと云ふ又傍らの樹下に一碑を建てゝ平兼盛の「みちのくの安達ケ原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか」と云へるを刻せり茲を過ぎ行くこと數十歩にして荒れ果たる古刹ありて觀音寺と號し寺に鬼の用ひたる飯焚き鍋、人斬庖刀等を藏す、去れど兼盛が鬼といひしは眞の夜叉の事には非ずして其友重之の妹が容貌うるはしと聞きて戯れに鬼と言ひやりしまでの事にて和歌の心得ある者は誰しも之を疑はず然るを誠に鬼の棲みしやうに言觸らして古くより愚民を欺きしは賣僧等が爲めにする所ありての計ごとなるべし

◉飯坂温泉

福島縣に温泉多しと雖も皆土地僻陬にして眺望快豁ならず其の温泉宿の如きも建築の壯麗雅潔なるを見ざるが中に風趣品等ともに上位を占め貴顯紳士の逗留するに羞ざるの地は獨り飯阪温泉あるのみ、飯阪は福島町の北二里十町、岩代國信夫郡飯阪町に在り東西十町、南北八町、舊阿部播磨守の領地にして園町温泉を以て生活する者多く人家七百餘戸、商家の數二百餘戸、温泉宿は實に三十戸の多きあり、先づ此町に向ひて入口の阪を登れば右に摺上川を隔てゝ湯野村（此村にも温泉あり次項を參看すべし）及び愛岩山を望み左折右曲して十綱橋の前を過ぎ一轉すれば直ちに温泉宿の前に出づ此地温泉のいと古きものは鯖湖、透達の二泉にして共に町の中央に在り往昔日本武尊東夷征伐の砌り偶ま此地を過ぎたまふ折ふし恙あらせられしかば此の鑛泉に浴し給ひしに立どころに御腦平癒せる故に地名の鯖湖を取りて直ちに湯の名に命ぜられたりと言傳ふ今は透達混浴場の傍らに瑠璃尊を勸請し左側に「あかずして別れし人

のすむ里はさばこのみゆる山のあなた乎」と云ふ樂翁侯自筆の古歌を刻せる碑石を建設せり其他十綱町の岸に有を波古の湯と云ひ瀧ノ町に在るを瀧の湯といひ泉質は孰れも弱性の鹽類泉にして温度は攝氏の四十度内外、効能は僂麻質斯、脚氣、各神經の麻痺、貧血病、腺病等に宜しと云ふ偖此地温泉宿の内鯖湖、透達二泉の邊りにあるを和久屋（佐藤うめ）謗引屋（伊藤仁兵衛）桝屋（半田太五右衛門）堀江屋（堀江政藏）網屋（渡邊長太郎）佐藤屋（佐藤繁右衛門）といひ瀧ノ湯近傍にあるものを花水館（石堂寛助）角屋（中山辰五郎）桝屋（片岡とし）堀江屋（堀江常右衛門）といふ皆二階、三階建ちの巨屋にして客室數十を有すれども多くは木賃の客を宿し又浴客をして合浴所に通はしむるの不便あり其中に花水館は從來の陋習を破り家屋を當世向きに新築して都人士の來泊を俟つものゝ如し、館は二層建ち半西洋の塗屋にして空中に架せる如き門廓を媒して艇下の内湯に導き樓上四十疊の室を大廣間とし猶ほ足らざる時は界の張壁を取外し

て一大會堂を作るの準備あり欄に倚りてながむれば前は摺上川の清流を隔てゝ湯野村の温泉場と相對し北に愛岩山を望み西北に大作山を觀、西南の方に當りて吾妻嶽の噴烟空中に立昇るを仰ぐべし、其の宿泊料は一泊二十五錢より五十錢まで三等の等級ありて料理は客の注文に隨ふ、町内別に料理店、小間物屋、呉服店、寫眞師及び警察署、郵便電信局等ありて浴客の逗留中不便を感ずる事なく獸肉、魚肉も亦乏しからざるが中に摺上川に產する鱒、鮎、鰍は味ひ殊に佳なり前記十綱町より對岸の湯野村に架したる十綱橋と云ふは西洋風の釣橋にして長さ三十二間、兩岸に華表の如き柱を設け鐵綱を之れに取付けて橋を支へたるものなれば傖夫をして一見其の奇工に驚かしむ、其他近傍の舊跡を擧ぐれば市街の西北に大作山あり是れ鵬の城趾にして治承年間佐藤庄司元治の據る所俗に之を丸山城趾又は佐藤の館と稱す元治は湯の庄司と呼び繼信忠信の父なり右大將頼朝の泰衡を伐つや元治は石那阪に戰ひて死せり、又摺上渠

碑あり碑は米澤の藩臣古河重吉の事を勒するものにして重吉は國財を仰がす邑民を集めて摺上川より渠を鑿り以て灌漑に充てんとし寛永元年に至りて竣工せり今此水を得て耕す者三十二村の多きに及ぶと云ふ、飯阪より七八町ばかり福島の方に立戻り更に右に折れて二三町を進めば最と古びたる寺門あり之を瑠璃光山醫王寺となす此寺は由緒いと古くして什物には義經の笈、辨慶の筆になれる般若經幷に下馬札、繼信忠信兄弟幼時の玩弄物、佐藤家にて用ひし堆朱の椀類を藏す浴後散歩かた〳〵就て一覽すべし、東京より福島まで下等瀛車賃一圓六十五錢福島より飯阪までの人力車賃は二十錢、午前六時四十分上野發の瀛車に乘れば午後五時には飯阪へ着すべく猶ほ仙臺の方へ赴く旅客は同所より新設の長岡停車場に出るを善しとす、因に記す福島町は東北鐵道の各驛中仙臺、字都宮に亞ぐの繁昌市街にして福島縣廳の所在地なり、停車場前には上安、松島屋、太田屋等の旅居あり、本通りの藤金、郡役所前の松葉館其外手塚

屋、鹽六、横山、伊勢屋等も亦市内屈指の旅館なり

◉信夫山公園

福島より飯阪に赴く途中福島を距る僅かに十町許りの處に容ち臥牛の如き一丘陵あり是れ古歌に名高き信夫山にして今は山巓を開きて公園地と爲せり、登路南より通じ中腹に一二の割烹店あり、頂きは稍や平坦にして崖に接して掛茶屋簷を連ね北隅に招魂社、其の右方深林の中に縣社黒沼神社あり欽明天皇の后石姫を祭れり、山上には櫻樹あり楓樹あり南に福島市街を一望し仰いて吾妻山の噴烟を觀るべく俯して阿武隈の清流を瞰むべく風色明媚殊に中秋の觀月に宜し、因に記す河原左大臣が「陸奥のしのぶ文字摺誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに」と詠ぜし文字摺石は福島の東一里、阿武隈川の對岸なる岡山村大字山口の觀音寺境内に在り、石の長さ一丈二尺幅六尺九寸地上よりの高さ六尺許り、中古此石に

四季の花を載せ其上にて布を摺りて朝貢とせし事ありしが久しく土中に埋れて知る人なかりしを近年信夫郡長柴山某氏其邊りの土を堀取りて石を地上に顯はし周圍に柵を設けて人の漫りに破毀する事を禦ぎ傍らに一碑を建てゝ河原左大臣の歌を刻せりと云ふ、福島より往復の人力車賃二十錢暇ある人は往て一覽すべし

◉湯野村温泉

飯阪より摺上川の流水を隔て北に湯野村温泉あり、地は伊達郡に屬し戸數凡そ二百戸過半温泉の爲めに生活す、温泉宿は多く摺上川の岸に崖造りの家を設け往來の方より見れば二階建ちなれど川の方より望めは初めて四階五階の家なるを知るべく欄に倚れは南に飯阪の商家妓樓と相對し呼べば將に應へんとす、温泉の湧く處都て三ヶ所皆な摺上川の岸に混浴場を設け之を橋本湯、切湯、狐湯と云ふ其の泉質は飯阪と同じく弱性の鹽

類泉にして温度は攝氏の四十八度、無臭無味なれど色は少しく白粉色に濁れり、温泉宿の重なるものを叶屋文作、綿屋常七、河股屋道、和乗屋いし松葉屋大次郎と云ひ旅籠料は上等（晝食共）一日五十錢、中等三十五錢、並二十八錢、別に木賃の法に依り浴客をして平民的、經濟的に宿泊せしむ、湯野村より摺上川の右岸に沿ひて登ること十五町の處に穴原温泉あり道幅二間餘り途中一二の小阪あれども能く一人曳人力車を通ず去れど運動を試みんとする人は村盡處より直ちに摺上川の磧に下り絶壁の下を歩して同處に到らば水光緑影愈々妙に入るの思ひあるべし、穴原には摺屋川の流れに浴ひて温泉宿二軒あり一を吉川屋多利造、一を和泉屋倉吉と云ふ其前に淵ありて鱒、鮎等は多く此處にて漁獲す（此地に來るには長岡停車場にて氣車を下る方最も近く道路も平夷にして能く車を通ず）

◉高湯温泉

福島町の西四里吾妻嶽の北麓に高湯温泉あり、其の途中庭阪（福島より二里）までは米澤の別街道にして坦々車を驅るに宜しけれども庭阪より西は徒歩せざるを得ず、庭阪にも亦温泉場あり其泉は高湯より樋を設けて遠く此地に導きたるものにして綿屋、丸本屋二軒の温泉宿あれども温度温さが爲めに春、秋、冬の三季は浴するに堪へずと云ふ、庭阪より左折して田圃道を辿り行くこと半里餘字姥子といふ處に達すれば茲より道は急に嶮峻の度を增し始終天戸川の流れに沿ひて登る、高湯は信夫郡今阪村に屬し海面を抽こと二千三百尺、三方は山を以て圍まれ空氣清く風凉しくして避暑には適當の地なり、温泉湧き口は都て四ヶ所、熱湯、疝氣湯、瀧湯、玉子湯と云ひ硫黄泉にして温度は攝氏の四十二三度、無色透明にして味ひ鹹らく且少しく廢卵の臭ひあり、温宿泉は信夫屋、吾妻屋、安達屋等四五軒にして家居皆な手廣なれども多くは農民、樵夫を得意の客とするが故に座敷向き清潔といふには非ず旅籠料は一日廿八錢、

別に木賃の法あり、又此地より微温湯温泉へ一里半、一切經山の峯を越ゑて吾妻嶽噴火口まで二里なり

◉土湯温泉

土湯温泉は福島町より西南四里二十町、東吾妻山の麓荒川の上流に在りて海面より高さを二千二百尺、其地は土湯越の峠を經て猪苗代に至る間道に衝れり、福島より三里半荒井村字地藏原まで人力車を通ず（人力車賃三十五錢）れども同所以西は峻阪連續して車を通ぜず、温泉涌口は二ケ所之を中の湯、下の湯と云ふ温度は攝氏の四十度乃至四十二度にして衰弱病、貧血症、皮膚病、疥癬等に効あり、旅底は井升屋和吉、和泉屋民之助、中村屋庄四郎、津田屋久治、信夫屋伊吉等にして家屋は孰れも二層の高樓を構へ普請の模樣は略ぼ高湯に同じく宿泊料、木賃等の定額も亦高湯と同一なり、此地より吾妻嶽噴火口まで三里餘途中男沼、女沼、恩の瀧、燕瀧、仙水沼等の勝地あり又松川停車場へ里程四里、二本松停車場へ同じく四里半、二路ともに山道なれば人力車を通ぜず故に仙臺の方より來る旅客も福島にて滊車を下るを便利とす

◉鎌先温泉

人皇百三代稱光院の御宇正長元年戊申四月の頃とかよ奥州白石の農夫某藏本山に入りて木を樵り薪を集め居たる折しも咽渇さて堪へ難ければ携へたる鎌をもて巖の隅を穿ちしに水は出ずして手も浸されぬ程の温泉滾々として湧出でぬ鎌の先より得たる靈泉なればとて此地を其儘鎌先と名けしが康正年間大水の爲め山崩れて湧口堙沒し夫より百廿五年の後ち再び温泉湧出でたれども地震の爲めに其口を塞がれて跡を絶ち其後享保年間三たびにして靈泉湧出で今に至るまで絶ゑず云々、是は俗間に傳ふる鎌先温泉の由來なれども眞僞は知らず、鎌先は宮城縣下磐城國刈田郡福

岡村大字藏本に在り日本鐵道會社の白石停車場を距る一里廿八町にして方角は西に當れり白石よりの新道は稍や平かなれども始終爪先上りの勾配にして人力車は一人曳十五錢内外なるべし鎌先は人家三十戸ばかり地は兒捨川の上流に在りて四面皆な山を繞らし遠望の景には乏しけれども其の閑靜なるを宛然一小仙境に異ならず鑛泉は鎌先山の半腹より湧出し多量の硫酸那篤瑠母と硫酸加留母とを含み色は少しく黃にして鹽味と硫氣とを帶ぶ此の湧口より樋を設けて温泉を浴池に導く、浴池は長さ三間幅二間ばかりのもの二個、皆な石を以て疊み一を總湯と云ひ一を留湯と云ひ湯瀧となりて樋より落來るさま略ぼ伊香保の内湯に同じく其の効能は肥胖病、慢性便秘、多血及び逆上症、膓加答兒、胃加答兒、脚氣、僂麻質斯等に宜しと云ふ、温泉宿は一條一平（温泉主）を始め鈴木屋幸右衛門、最上屋卯平等二三軒がある中にも一條は今川義元の臣一條長吉の末孫なりとて頗る由緒ある舊家にして家も亦手廣なり宿料は一日二十錢より四十錢の間なれども別に座敷のみを貸して自炊をも爲さしむ

◉青根温泉

白石停車場より西北六里三十町、陸前國柴田郡前川村不忘山の麓にある鑛泉を青根温泉といふ宮城縣下第一等の温泉と稱せらるゝ程なれども東京にては其名を知る者さへ稀なるは道遠く地僻なるが故なるべし先つ青根に起かんとするには上野午前六時四十分發の汽車に乘りて午後五時半白石に達し其夜は白石に一泊し翌る朝人力車を走らせなば四時間にして青根に達すべく（人力車賃は一人曳五十錢内外）歸途は遠刈田温泉に憩ひ大河原停車場に出るも善し、青根は海面を抽くこと三千三百尺三面山を遶らして新樹は綠滴たるか如く唯だ東の一方のみ開けて陸前、盤城の二國五郡を脚下に瞰下し遙かに宮城の沃野を隔てゝ松島金華山を水天髣髴の間に認め其の絶景筆には書き盡すべくもあらず、鑛泉湧口は都て三ヶ所

之を大湯、名號の湯、新湯と云へ其色透通りて少しの鹽味あるが中にも大湯には二個の樋を設け湯は瀧となりて落來り且浴池の廣さを他に多く其比を見ずして殆と西洋の淤泳浴場の如し鑛泉温度は攝氏の四十五度にして其の成分は固形分を含むを少なく僅かに少量の食鹽、格魯兒加留母、硫酸曹達等を含有するのみなれば浴客中には此泉を汲みて煮焚の用に供するもあり又其の効能は上衝、頭痛、肺勞、精神病、婦人血の道、脚氣、疝氣等に宜しと云ふ、温泉宿は都て五軒中に就て佐藤仁右衛門（不忘閣）丹野七兵術（醉嶂館）の二軒最も宏壯にして座敷も小奇麗なり佐藤は其の先祖なる矢澤豐後守が天文十五年四月此の温泉場を開きしより今に至るまで家系絶ずと稱する舊家にして舊仙臺藩主の別邸たりし御殿を客室に用ひて之を不忘閣と名け又丹野七兵衛は先年宏大なる和洋の三層樓を新築し間數凡そ一百餘室を備へて客を待つ、丹野の宿料は上等一日三十五錢、中等廿八錢、下等二十錢内外、席料は雜費とも八疊（次の間付）一週

間七圓を第一等とし同じく五圓を二等とし最下等に至りては一日八錢にても宿泊せしむる事あり料理は重に川魚を用ひ外に雉子あり小鳥あり鷄肉の如きは百目の價ひ六錢ぐらゐ都人士をして其安きに驚かしむる程なり又青根より浴後散策すべき處を記せば浴場の西十町にして物見岩あり此岩に上れば四望豁然として眼界の達する所遠く數十里の外に出で眞に活畫を觀るが如し、青根温泉より西三里を登れば不忘山の頂きに達す不忘山は一名を刈田嶽と云ひ山中に役の行者開基の藏王權現を安す、山は休火山にして海面より高さを六千五百尺頂上に藏王沼あり即ち舊噴火坑の水湖と變じたるものにして其水藍の如く炎天と雖も潤るゝをなし其の途中賽の河原、劔の峯、三途川等あり蓋し山を冥府に擬して斯かる異名は負はせしもの乎、又山頂の舊噴火坑より發し冷水堂の下に至りて清川と合し宮驛にて白石川に灌ぐものを濁川と云ふ水質は多くの硫氣を含み其色常に白濁一の魚類を產せず其の上流は直下して瀑布となり回流して

奔湍となり岩に激し石に觸れて飛沫玉の如く兩岸には懸崖並び峙ち奇景云はん方なし、此景は青根より峨々温泉に到る途中に觀るを得べし

◉峨々温泉

同温泉は青根を距る一里餘の山奥に在り青根を離るゝを幾何もなくして山を挾み南北より流れ合する河あり南を清川といひ北を濁川といふ危ふき濁木橋を渡り匍匐ひつゝ崖を攀ぢ登り峰傳ひに行くと遠からずして稍や幽に入り樹木欝葱天を蔽ひ奇岩屹突地に跨がり殆ど異郷に入るが如し瀑あり三瀧といふ三流にして斷崖絶壁を迸り出で玉を碎き雪を散らして落つ又瀧あり大瀧といふ幅十餘間直下數百間轟々山岳を震動し飛沫綿の如し行くを半里急に峻阪を下り濁川の水溪に入れば即ち峨々温泉なり激流琴々琴調を爲し地獄石大黒石等は峨々として雲表に聳ゆ雨あれば遙かに千丈の瀑布を看る之れ不忘山塞の三途川より流るゝ細流なり温泉主

は元と竹内時保なりしも今は關口其他某々の人々に傳はり客舍は宏壯にして稍や清淨なり

◉遠刈田温泉

同温泉は大河原停車場より青根温泉に赴く途中、刈田郡宮村に在り地は不忘嶺、青麻山等の峰巒に圍まれ松川の溪流を擁して頗る閑雅を極む温泉湧口は都て五ヶ所にして上ノ湯、東ノ湯、目ノ湯、下ノ湯、新湯と云ふ上ノ湯は透明無色にして中性の反應あり其味は微鹹にして温度は攝氏の五十度以上を保ち精神病皮膚病等に効驗あり東ノ湯は温度上ノ湯より下るを五度鐵分及び炭酸亞兒加里を含み膈胃病或は疝氣、脚氣、子宮病等に効能あり抑も此泉源の由來を原ぬるに昔し岩代國大沼郡の大沼刑部と云へる者蒲生氏郷に仕へしが故ありて祿を辭し此地に隱遁す後ち四世の孫大沼勘十郎なる者慶長六年岩崎山の麓に於て始めて此の温泉を發見

し元和二年に至りて浴室を新築せしと云ふ或は曰く往昔奥州の金賣吉次黄金を採掘せし處にして其後仙臺藩祖政宗公も亦此地より金鑛を採取せし事ありと此説遞かには信ずべからず、客舍は佐藤源兵衛、吾妻長吉、遠藤勘五郎、大沼勘十郎、小室市之丞、佐藤勘太郎等數十軒あり其の一日の宿料は三十錢内外なりと云ふ

◉小原温泉

小原温泉は刈田郡小原村桂澤山の麓に在り白石停車場より西三里山形新道の傍ら白石川上流の右岸に到れば人家三四十戸軒を並ふるを見る即ち小原温泉なり土地は天然の風色を備へ白石川は其左に浴ひ流水石に激し澎湃雷の如く兩岸の巖石は磊々或は起ち或は伏し背後には森林鬱蒼として萬緑滴り川には鱒、鮎を産する等實に避暑好適の地なり、温泉湧口は古湯と稱し石を截りて浴室を造り泉質は透明無色なれども久しく浴地に

渚留すれば稍や暗黑色を帶び且硫化水素の臭あり温度は攝氏の六十四度故に白石川の水を加へて適宜の温度となし以て入浴に供す新湯は白石川の流れに浴ひて湧出し泉質は古湯と異なるをなきも新湯は古湯より二十度を下れり、昔し伊豫守義經の臣常陸坊海尊此の温泉に浴し里人に告げて曰く其泉能く眼病を癒すべし然れども油膩の類を混すれば忽ち其効を失ふと村民其言を守り爾來曾て油に染みたる物を投ぜず又頭髪を洗はず以て今日に至れり、湯主は四竈太郎兵衛、同利平、新湯主は齋藤員衛其他一二軒にして客室孰れも清潔なり、又白石萬壽閣にては小原温泉宿と特約を結びて同他行人力車の切符を賣捌くと云ふ

◉仙臺市

東北鐵道の滝車は下野より二回發車して仙臺に着す其の里程は二百十五哩にして實に十三時間を費す仙臺は避暑の地として讀者に紹介すべき處

にはあらざれども市の内外亦た名所舊跡等も少なからねば筆の序に其の案内を爲すを左の如し」仙臺市は舊伊達侯の城市にて奥羽中の一大都會なり市坊の數は三十八、東西三十四町、南北三十二町戸數は一萬六千三百餘戸、人口は凡そ七萬人、鐵道停車場は市の東端東七番町に在りて東京上野を距る街道八十九里餘磐縣福島縣へ廿二里、巖手縣へ四十八里、山形縣へ十六里卅二町あり官衙にては宮城縣廳を始めとして警察署、宮城控訴院、仙臺地方裁判所、集治監、第二師團本部、第二高等中學校、郵便電信局、等皆な市内にあり今仙臺にて一覽すべき場所を擧ぐれば「青葉城趾」は市の西、廣瀨川大橋を渡りたる處にありて今は第二師團本部の本營となれり城は元と仙臺藩祖黄門正宗卿の築く所にして舊城門は今猶存して營門となれり、「經ケ峰靈廟」は黄門正宗卿以下二代の墳墓を置く所にして廟下に一宇の精舍ありて正宗山瑞鳳寺と云ふ此地は廣瀨川の西綠樹蓊鬱たる處に在りて山門に入り大華表を潜り數十階の石段を登れば即ち拜殿に

達す瑞鳳殿三字の額は佐文山の揮毫にして深殿には貞山公の靈像を安置す前の羽林義山公の廟を感仙殿といひ後の羽林雄山公の廟を善應殿といひ共に瑞鳳殿を距る西の方二十歩ばかりの丘陵にありしが戊辰の亂に本殿を毀たれ今は感仙殿の深宮を存するのみ、「櫻岡公園」は市の西瑞に在りて園内に櫻岡神社を祝る華表の傍らに老梅古松二株を栽ゑ松を般若の松、梅を八房の梅といひ共に正宗卿が朝鮮より齎らし來りしものなりに云傳ふ又た園内に挹翠館、梅三亭等の割烹店其他珈琲店等數軒あり、「榴ケ岡」は停車場の東天神社の傍らに在り此地昔しは躑躅の樹多かりしをもて其儘岡の名に呼來りし由なれども今は一本の躑躅をも見ず却て櫻樹多くして春時花の爛熳たる頃は遊人西より東より集まり來り頗る雜沓を極むといふ古歌に「東路やつゝじの岡に來て見れば赤裳のすそに色ぞかよへる」とあるは此地の事を詠みしものにや未だ考へず、「青葉神社」は市街の北端に在りて境内に登れば市街七萬の人家を一眸の中に集め眺

望絶佳の地なり社は縣社にして武振彦命を祭り祠宇の傍らに男澤抱一撰文の碑を建て又境内に料理屋等あり、此外神社佛閣等最と多けれど左のみはとて茲には漏しつ又旅人宿は多く國分町にあり其最も大なるものは針生久助、安藤利兵衛、大泉梅次郎、齋藤忠助等にして孰れも停車場前に出張店を設け瀛車の發着毎に旅客の送り迎へを爲す等最と丁寧なり又

市外の名勝二三を擧ぐれば

燕澤蒙古の碑　仙臺より東南一里餘り、榴ヶ岡の北より原町に出で玉田横野を過ぎて猶ほ行くを數町にして岐路あり是より左に折れて案内村を過ぎ比丘尼坂を越ゆれば燕澤村に抵る路傍觀音堂の前に蒙古の碑あり高さ六尺幅三尺斗りにして碑面に五十一字を刻す文字多くは古體或ひは畫を省きたるもの或ひは梵字樣のものありて讀易からず相傳ふ此碑は元の僧祖元なる者自ら文を作り其徒清俊をして之を石に刻せしめ元の死者十萬の靈を弔ひたるものなりとぞ祖元は弘安二年北條時宗の招きに應じて

鎌倉に來り建長寺に長たり越て四年夏五月元兵十萬我が博多の津を襲ひしも神風の爲めに賊艦悉く覆沒して屍は海を埋め能く生て還る者僅かに三人なりしと祖元は同邦の人にして且僧侶の身なれば竊かに哀傷に堪へず翌五年仲秋は即ち小祥期に當るをもて海惋經を念じ且此碑を樹てゝ靈魂を弔せしものなり其文に故ら奇異の文字を用ひしは嫌疑を避けんが爲なるべしと云ふ、仙臺より燕澤まで人力車賃一人曳片道十五錢道路平坦四十間にして達す

多賀城趾　岩切停車場より東南二十町（人力車賃八錢）市川村市川橋の東に方四百間許りの丘陵あり是れ即ち多賀城の古趾なり今猶ほ地中より古瓦を掘出す事ありて好事家は之を硯に造りて珍重すといふ此城始め天平九年には多賀の柵と稱へ寶龜十一年に至りて多賀城と呼べり多賀城碑は昔し多賀の城門に立て四境の遠近を示したるものにして今は堂宇を設けて雨露を防ぎ傍らに一本の松を栽ゑたり其碑面の文左の如し

多賀城

去京一千五百里
去蝦夷國界一百二十里
去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里
去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東山節度使從四位上兵部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也

天平寶子十二月一日

玉川古跡　多賀の碑を距る十町許りの田間に小渠ありて野田の玉川の古跡なりと言傳ふ橋の傍らに碑を立てゝ能因法師が「夕ざれば汐かぜこして陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり」の和歌を鐫せり或は云ふ是れ後人の附會せしものにして眞の玉川は陸奥三戸郡に在りと

◉鹽竈ノ浦（鹽神竈社）

仙臺より滊車賃十錢、岩切にて東北鐵道の幹線より岐れ三十分にして鹽竈停車場に達す鹽竈村は戸數七百五十戸人口四千三百餘人、東北に一の江灣を控へ堀割は村の中央を横きりて舟を行るに便なり旅店は海老屋、太田屋、齋藤を上等の部とし孰れも停車場前に出張店を設け鹽竈神社への案内又は松島行小舟雇入れ等の周旋を爲す、鹽竈神社は停車場より西の方僅かに五町ばかりなる小山の上に在りて表阪は直にして嶮、裏阪は斜めにして緩、割烹店勝書樓は即ち裏阪の中腹に在り表阪を登り隨神門を潜り正門を入れば正面に本宮ありて武甕槌命幷びに經津主命を祭り右の方別宮には岐神を祭り三座を併せて奥州一宮正一位鹽竈大明神といふ社内に南蠻鐵の燈籠あり高さ六尺餘扉に日月の形を鐫り上に文治三年七月十日和泉三郎忠衡寄進之敬白の數字を刻せり忠衡は奥州押領使鎮守府將軍藤原秀衡の三男にして文治三年は今より七百餘年の昔、其燈の古色蒼然たるも亦宜なり、社前に古櫻樹あり堀川帝の御製に「あけ

くれにさぞな愛見ん鹽竈の櫻かもとの海士のかくれ家」とあるは此櫻を詠ませ給ひしにや縱し元の樹は朽たりとも此櫻はおほよそ其孫玄孫には當るなるべし、神釜社は町内海老屋旅店の前にありて所謂神釜なるものを祭れり釜は往古鹽土の翁始めて此地に下り監を燒きて民を敎へたる時に用ひし器なりと言ひ徑四尺八寸許り元は其數七口ありしも今は唯だ四口を存せり村民傳へて言ふ國に殃ひある時は釜中の水其色を變し或は紫或は黃時に隨ひて同じからず故に妖孽の兆を恐れて之を祭ると、千賀ノ浦とは鹽竈より松島に至る海濱の總稱にして後拾遺集に道信朝臣の「千賀の浦に浪よせかへる心地してひるまなくても暮しつる哉」と詠しは玆るなべし千賀ノ浦の景色は松島舟行の路すがら之を眺め得べきも勝畫樓より望めば更に風物の新なるを覺ゆ、鹽竈より松島までの舟賃は一艘片道二十五錢、往復三十七錢五厘、一日雇切り七十五錢、舟は客五六人を容るべく風ある時は帆を揚げて駛るに疾きを箭の如く亦爽快なり

鹽竈停車場より南一里半七ケ濱村大字菖蒲田に海水浴場あり道路平坦にして腕車を驅るべし若し水路に依らんとならば貞山堀より舟に掉さし一里餘大代の岸に達し此處より行くを十五町にして菖蒲田に達す此地は前に大洋を望み金華山は眉の如く左に秀で相馬崎は帶の如く右に連り海岸には靑松一帶白沙と交はり古へより眺望ケ崎の名あり、浴舍はに大東館あり仙臺の某々等協力して新築せしものにして家屋宏壯客室數十室あり其の宿泊料は一日三十錢以上五十錢までにして魚類は殊に新鮮にして佳味なり、海濱は大洋に臨むを以て大東洋の潮流金華山沖に來り日本海より廻流する所の潮流と相交はり土佐の方面に向つて反激する餘勢を受くるものなれば潮勢度に適し汀沙淸淨にして實に冷水浴には恰好の地なりとす、鹽竈より人力車賃は片道十二錢なり

◉菖蒲田海水浴

◉松島（附り富山）

天下有山水。各擅一方美。衆美歸松洲。天下無山水。と是れ南山禪師が松島を詠ずるの詩、一言其景の東洋に冠絶せるを言盡したるものと謂ふべし松島は陸前國宮城郡東北部の海邊にありて俗に八十八島と稱する無數の島嶼海上に點在し島は悉く松を生じ且其形に依りて各々名あり、松島は安藝の嚴島、丹後の天橋立と共に日本三景と稱するを日本事蹟考にも見る且世人の常に口にする所なれど若し一々其勝を探り來りて彼此を對比すれば松島は恐らく三景中に冠たる者なるべし偖此の奇景を賞せんとするには鹽竈より海上三里の間舟を雇ひ行々左右の島嶼を觀覽するを善しとす、先づ鹽竈ノ浦を漕出れば第一に目に入るものを籬島とす、島上翠竹林を爲し林中に一祠ありて里人間籬ノ明神と稱す鹽竈の景は此島あるが爲めに一層眺めを增すものにして遊人は夏日此島に上りて涼を納

れ又貝を拾ふを常とす、舟其邊りを過ぎて千賀浦の灣口を出れば眼界忽ち開けて左右に無數の小島を一望す島には大なるあり小なるあり遠きあり近きあり舞ふ如きもの、眠る如きもの、洞門あるもの、巖窟あるもの千狀萬態一々指顧するに遑あらず其の沖合瑰ケ崎には鯛の生巢なるものあり二町四方の海を圍みて之に鯛其他の海魚を養ひ海荒く浪高くして漁獲多からざる時の備荒貯蓄に充つ島中に割烹店吉田屋あり客若し三十五錢を投すれば一竿と餌とを與へて隨意に魚を釣らしめ其獲たる者を膾とし鹽燒として膳に上すと云ふ瑰ケ崎を右に見て灣口より北に轉ずれば島愈々多くして愈々近く宛ら盤面に碁石を布きたるに異ならず舟此間を過行く時は右顧左盼前に歎べば後に妬み彼に精しければ此に粗にして眸も爲めに忙はしく其妙其奇筆の盡すべきにあらず今ま松島に至る迄の內島嶼の稍や大にして且著名なるものを列記すれば

籬島　尾島　馬放島　鞍掛島　鵜島　潮干島

茶臼島　兎島　二王島　桂島　宰相島　后島
内裏島　辨天島　蟾蜍島　鎧島　兜島　鐙島
笠島　化粧島　伊勢島　嚏吹島　箕輪島　小町島
野々島　帽島　引通島　材木島　大黒島　蛭子島
布袋島　擧島　旭島　千貫島　蛇島　燒島
翁島　經島　九野島　福浦島　德浦島　雄島

等なり、舟は此島嶼の間を縫ひ順風の時ならば鹽竈より僅かに一時間餘にして松島村の波止場に着す、松島は戸數百戸ばかりの一小村落にして其前は一小港灣を爲し東北に丘陵を繞らし海岸には旅店及び名物の硯石埋木細工、福浦竹等を賣る家軒を連ね近傍に瑞嚴寺、五大堂、觀瀾亭、雄島等往て觀るべき處多し、旅店は觀月樓を第一とし海岸に三層樓を築き客室數十を備ふ其他松島館(此館今は倶樂部となれり)加賀三亭、鈴木屋等ありて皆傍ら料理を兼業とし宿料は一泊三十五錢を定めとす又此地より松島停車場まで距離三十町、人力車賃片道十錢なり故に東北の方に赴く旅客は松島浦より舟を出し松島停車場に出るを便利とす例の通り此

地近傍に於て特に一覽の價ある勝區の案内を爲す左の如し

五大堂　松島村の東岸に斗出する小半島の名にして之に二短橋を架して陸に通ず一は三間、一は六間橋板の間を透かして空虛にし其透目より碧水の漫々たるを瞰下し得べし島上に五大堂あり大同年間阪上田村麿東征の日此地を過ぎて多門天の像を安置し後ち慈覺大師五大明王の尊像を祭る故に五大堂と云ふ、慶長五年に至り藩祖政宗公名工鶴左衛門等に命じて堂宇を修造せしめ以て其觀を新たにす、島上に老松蟠屈し枝葉逆しまに垂れて奇景極まりなし又二橋の間に八幡の祠あり其近傍多く碑石を立つ、此島昔しは藤花咲き亂れしにや民部卿忠敎の歌に「踏わけて渡りもあらず紫の藤咲きかゝる松島の橋」と詠ぜしあり松島の橋とは此の二短橋の名にして今は渡江橋と稱す

觀瀾亭　村の西月見崎に在り此地の眺望また佳絶にして松島八景の中に算へらる傳へて言ふ此亭は政宗公遊覽休泊の爲めに設けたるものにして

政宗公曾て豊太閤より伏見殿の一亭を賜はり之を江戸の邸中に移せしを後ち忠宗公再び此地に移して修補を加へしものなりと、外園には竹垣を結回らし亭は皆栂の柱を用ひ室は廣くして且雅潔なり亭上に扁額を掲ぐ一は觀瀾亭の三字にして佐文山の書、一は雨奇晴好の四字にして政宗公五世の孫吉村公東坡が西湖を詠するの詩句中より摘採して自ら筆する所なりと云ふ、亭に上れば近く雄島、經島、福浦島、德浦島、燒島、九野島等を望み沖合の羣島之を圍みて風色松島に冠たり

瑞巌寺　は一名松島寺と稱し松島村の北二町餘の處に在り仁明天皇承和五年の創建、眞壁平四郎なる者の出家して宋に入り法を經山の無準に受け歸朝して開く所の地なりと、一說には淳和天皇の天長五年慈覺大師の開基にして當時は青龍山延福寺と號せしとも云へり後ち北條時頼此處に來り法身上人と約して宗を天台に改め法身を開祖として寺を圓福寺と稱せり夫より後ち大覺、覺雄、智覺、覺滿、明極など云へる唐僧來りて住職と

なり九十一世義山和尚に至りて鎌倉建長寺派となり次世宗中和尚の代より妙心寺派に屬せり、慶長十年伊達政宗公紀州の名匠國次に命じて再び殿堂を造營せしめ四ヶ年を經て落成す今の瑞巌寺即ち是なり、佛殿は竪二十一間、横十二間正面に天竺より渡來せる正觀音を安して本尊とし側らに政宗公甲冑の像を安置し又殉死者の位牌を列す公の像は獨眼短面兜に長大なる半月を飾り手に軍配を携へたるさま眞に其人を見るが如し、殿内別に奥の間、上段の間、中段の間、孔雀の間等あり明治九年聖駕北巡の際此寺を行在所と定められ上段の間に玉座を設けぬ還幸の後ち寺に一千圓を賜ひて保存費に充られしと云ふ、寺畔に一の巌窟ありて法身窟と云ふ法身上人茲に座禪する所なり其の左方に陽德院、右方に天麟、圓通の二院あり山門の左右には市店列なり門の内外碑石多し

雄島　松島村を距る南四五町竹ノ浦の東南にあり小松崎より此島へ渉る橋を渡月橋と稱す長さ十二間俯望すれば碧淵人を呑まんとし目爲めに眩

す、島上に坐禪堂あり寛永年中雲居禪師の建つる所とす又松吟庵、見佛堂あり、坐禪堂の南にある一碑を賴賢の碑とす高さ一丈幅三尺六寸賴賢は御島の住僧なり其弟子匡心、孤雲等師の德行を傳へんが爲めに建つる所にして宋の僧寧一山の撰文幷に書を刻す、碑の側らに五輪の塔あり高さ一丈許り之を骨塔と云ふ、島上に八九樹の松を生じ周圍は斷岸數仞波濤奔騰して爽快言ふ可からず

●富山　松島の全景を賞せんとする者は此山に登らざる可からず富山は手樽村に在りて松島を距る二里弱なり、先づ舟を磯山の岸に着くれば茲に男女數人の案内者客の來るを待つあり先を爭ふて其の雇はれんを請ふ（案内料八錢）岸邊の小山を越えて田圃道に出で行くを十餘町にして手樽村の人家あふ處に出で夫より峻阪を登れば七八町にして頂きに達す山上には大仰寺及び大悲閣あり僧大顛書する所の額を揭げ中に阪上田村曆納むる所の觀音像を安置す、大仰寺に入り其椽先に坐して四方を眺むれば

一望豁然目の届く所百里の遠きに達し近くは鹽竈、松島の群島遠くは大海渺漫として水天の髣髴たるを望み松島十里の灣も亦た一泉地に異ならず世人口を揃て松島の景は富山にありと云ふは決して誣言にはあらず、但し山上にては大仰寺にて茶を薦むるの外旅舍茶店の設けなければ山に一日を費さんとする旅客は行厨、吹筒の用意肝要なるべし

◉作並温泉

仙臺にて滊車を下り關山越新道を經て山形、酒田に抵る旅客は途中の驛次に一の温泉あるを見るべし是を作並温泉と云ふ、地は關山峠の東麓に位し仙臺を距る西七里（人力車賃五十六錢雨天二割增）なり先づ仙臺市中を離るれば道は始終廣瀨川の流れに浴ひ或は上り或は下りて昂低一ならず凡そ三里にして一村落あり愛子と云ふ又一里餘にして熊根村あり茲より道は漸く登りて車の進むを疾からず溪流に沿ひて右に折れ左に曲り往

きゆきて作並に達す地形は山嶽三方に連亘し野川（廣瀬川の上流）其南を流れ土地深邃にして春は花晩く發き冬は霜早く降る、寒暖計は盛夏の候八十五度の上に昇らずして最も避暑に適す温泉宿は村松にふの一戸にして家屋宏壯客室七十餘を有し斜めに百八十級の長廊を架して野川の崖下なる浴場に通ず、浴槽は石を以て疊み大湯場と稱ふるは長さ八九間幅四間許りにして頗る廣濶なり此浴場は直ちに野川の急流に接するを以て前は奇岩怪石と相對し河水は石に激し轟磕として奔下す亦浴場に一奇景を添ふるものと謂ふべし、泉質は鹽類泉にして微濁あり唯だ川に近き故を以て雨後出水多き時は其水浴場を浸して澡浴す可からずと云ふ、岩松の宿泊料は上等三十五錢（晝食を除く以下皆同じ）中等三十錢、並二十五錢にして木賃は炭油を除き一日六錢五厘より十錢までとし合宿するものは別に席料を取らず客の好に依り一室を貸切るときは其大小と陋美とに順し初めて一週間壹圓より三圓五十錢までの席料を受くと云ふ、山形地

方に赴く者は此地より尚ほ峻阪を登る三里半にして關山隧道に達し夫より下り四里にして羽州路の國道に出づるなり編者先年酒田震災を實視せんとして偶〻此地を過ぐ時恰も晩秋行路數里の間滿山の紅葉錦繡を晒すが如く其の奇觀云ふ可からず而して里人は常に此景に馴れて一人の美を說くものなし若し此山此楓をして東京近傍にあらしめば日本紅葉の絕勝として歎賞せらるべきに惜むべき哉

◉鳴子温泉（温泉村八湯）

仙臺より岩切、利府、松島、鹿島臺の各停車場を過ぎ小牛田（東京より下等瀛車賃二圓三錢）に達すれば此地より赴くべき温泉場あり其名を鳴子温泉と云ふ、小牛田より西十里半を隔つるも地は羽前の新庄に通ずる新街道に衝るを以て乘合馬車等の往復するありて交通自在なり先づ小牛田より西すれば三里弱にして古河町に達す古河は陸羽街道の驛次にして人

家稠密、郡役所あり區裁判所あり警察署あり郵便電信局あり市街稍や繁盛なり茲より清水、下野目、岩出山、下一栗、下宮、鍛冶屋澤等を過ぐれば途中川渡、田中、赤湯、舊車、新車等の温泉場ありて浴舍簷を連ね皆温泉村八湯の内なり新車を過ぐれば大字鳴子村にして警察分署のある處より左折すれば鳴子温泉場に達す地形は三方丘巒を繞らし北方荒尾川を隔て、花淵山と相對す泉源を瀧ノ湯、鰻ノ湯といひ瀧は硫黄泉に屬し鰻は鹽類泉に屬す浴舍は遊佐勘左衛門、横谷善吉、大沼源藏等にして就中遊佐を以て最とす其の宿料等は一泊十九錢以上三十三錢までにして別に木賃の方法あるを猶ほ他の温泉宿の如し、小牛田停車場より此地まで人力車賃七十五錢、馬車賃五十三錢にして五時間にして達すべし（温泉村八湯は川渡、田中、赤梅、舊車、新車、鳴子、河原、中山とす茲には一々其案内を略す）

◉中尊寺

一ノ關停車場（東京より下等瀛車賃二圓十四錢）にて瀛車を下り旅客は此の古刹を一覽せざる可からず中尊寺は一ノ關停車場の北二里餘平泉村大字平泉に在り寺域は東西十七町、南北十三町の廣さに亘り老樹蓊鬱として茂生し元は東奥第一の巨刹なり、抑〻當寺は仁明天皇の御宇嘉祥三年慈覺大師の草創にして後ち貞觀元年清和天皇より中尊寺の號を賜はり堀河天皇の御宇には堂塔四十餘宇、僧坊三百餘宇を有せしに建武年間野火の爲めに燒亡し今は僅かに經藏、金色堂のみを存せり、經藏は天仁元年藤原清衡の建立にして舊は二階建の堂宇なりしか建武の火災に上層燒失し其の殘基に修繕を加へ今は一層の堂宇となれり裡に清衡、基衡納むる所の經卷を藏し又文珠獅子の本尊を安置す其左右に優闐王轡を把り淨名居士拂子を携へ善哉童子匣を捧げ佛陀波利錫杖を持てる像を置く皆毘首

羯摩の作にして美術の精妙を極めたるものなり、金色堂は經藏の東南に在り天仁二年清衡の建つる所にして大さ三間四面、上下四方悉く麁布を掛けて黑塗を施し上に金箔を貼して金色を耀かす故に光堂の名あり正應二年鎌倉將軍惟康親王此堂の永く雨露に洒されて金裝の剝脫せんを惜み保存の爲め覆堂を造立せり今存するものは是れなり、內部の梁、柱は皆彫刻を施して之に珠玉を裝ひ四隅には丹靑の柱を建て柱每に十二光佛を圖す其檀上には佛像十一軀を安し三檀中には藤原氏三氏の棺を歛むと云ふ、其近傍舊寺の遺趾少からず又近傍には平泉館趾、辨慶堂、衣川等の名蹟あり委しき事は高平眞藤氏の「平泉誌」を覽るべし（一ノ關より平泉までの人力車賃は二十錢なり）

◉五串の瀧

一に嚴美溪と云ふ一ノ關町の西三里餘嚴美村大字五串に在り、一ノ關停

車場を出で國道を北行して山ノ目宿に至り茲より左折すれば道は田圃の間を貫き杭打阪といふ處を過ぎ沓ケ鼻に至れば對岸に岩聳に水激するを觀、已に瀑布に近きを知る、五串より左折して岸に至れば磐井川此處に來りて山峽蹙まり水勢韃靼たり即ち瀑のある處とす、溪の左右巨巖の相對する處に橋を架し天工橋と名く橋下に一柱を用ひず形ち武州御嶽の萬年橋に似て小なり、其の下流に磐石あり上面平坦にして數十人を坐せしむべく此に蹲踞して上流を望めば瀑布の全形を見るを得べし瀑は四流に分れ京田といひ下多羅といひ小松といひ大瀧といふ其の近傍奇岩磊々として横はり風景略ぼ信濃の寢覺ノ里に似たり南崖に碑あり文は掛川藩儒松崎復の撰する所にして架橋の始末を記するものなり

是にて東山道の內なる東北部の案內を終りたれば更に東京に立戻り日本鐵道會社の前橋線、官設鐵道の直江津線近傍の避暑地へ導くべし

◉鬼石奇景

日本鐵道會社の前橋線は大宮より左に分れ上尾、桶川、鴻巣、吹上、熊谷、本庄等の各停車場を過ぎ軈て新町に達す（上野よりの下等瀛車賃六十八錢）新町驛の手前に線路を横ぎる河流ありて之を神流川と云ふ此川は水源を三國山の麓に發し東流して武藏と上野との州界を爲し新町驛の東にて烏川と合して利根川に入る平日は水涸れて河底磧となり居れども雨一たび至れば水勢滔々奔湍岩に激して急流となる其の上流鬼石、三塲の近傍は河底に怪石起伏して奇景言はん方なく上毛地方の文人墨客には其奇を探らん爲め夏季笻を曳く者多し其石は皆一種の木理紋ありて庭石に用ふるに最も妙なりと云ふ、此地に到らんとするには新町停車場にて瀛車を下り西南五里餘の道を歩めば鬼石村に達す（新町より鬼石までの人力車賃四十錢）其途中淨法寺村に八鹽温泉及び淨法寺温泉あり泉質

は鹽類泉にして其の成分効能共に磯部温泉と同一なれども地僻なるが爲めに其の名世に著はれざるは惜むべし、又淨法寺村には淨法寺と號する佛刹あり天台宗にして初め聖德太子當寺を草創し弘仁五年傳敎大師の中興せしものと言傳へ今存する山門の如きは殆ど八九百年前の建築に係るものなり以て寺の最も古くして且つ由緒あるを知るべし、鬼石淨法寺兩村ともに二三の旅店あれども海魚は至て乏しければ旅客は豫じめ鑵詰の類を携へ行くを肝要なり

◉伊香保温泉

汽車既にして高崎（上野より下等賃金七十六錢）に着すれば同所より澁川に至る鐵道馬車ありて汽車の着後凡そ十分間を隔てゝ出發す（澁川までの下等賃金十五錢）伊香保に遊ばんとする人は此馬車に乘りて澁川に至る同所の人力車立塲に七十二錢を投じて切符を買ひ二人曳の車を驅り

て伊香保に向ふべし、高崎より伊香保までの里程七里餘、内澁川まで五里の間は前記の鐵道馬車あれど殘り二里七町の間は澁川を出離るれば直ちに山道に差掛りて車の進むを遲く殊に雨後は稍や嶮しき阪に遭ふごとに車を下りて泥濘の中を歩行するの不便なれば腕車は最初より二人曳を雇ふを好しとす、澁川より凡そ一里許りも行きたる路の左傍に御影の松といふ古松あり明治十二年　皇太后宮陛下温泉へ行啓ありし時茲に御野立ありしとて村民後は萬里小路博房卿の歌と前群馬縣令揖取素彦氏の題辭とを請ひ碑に彫りて樹の傍らに建つ卿の詠は

芝中の松の宿りに千代かけて殘るは君か御影なりけり

夫より猶ほ阪道を登り澁川より凡一時三四十五分間にして伊香保に達す（前橋より赴かんとする人はやはり同市より澁川に通へる鐵道馬車に乘り澁川よりは同じ道を取るべし）伊香保市街は元と嶮しき山の中腹を拓きしものなれば南に山を負ひ西は溪に臨み唯だ東北の一方うち開けて遠

く田圃を見晴すのみ、家は皆崖を築き石垣を疊みたる上に建連ねたれば乙の家屋は甲の床と相對して一段は一段より高く其狀楷梯を斜めに立掛けたるが如し、廣袤は東西三町、南北四町餘、戸數は五百戸ばかりも有れど冬季霜雪の多き故にや瓦屋根は至つて少なく名高き温泉宿と雖も多くは柿葺の屋根を用ふ、南北の中央にある一條の阪路を仲通りと稱へ此外左右に裏町ありて上の方を上町といひ下の方を下町といふ、下町の入口に紅葉館の支店と伊香保倶樂部等もあり郵便電信局は温泉宿島田多朔方に之を設け先年より常設の許可を得て信書は毎日三回の集配を爲す、上町の突當りにある石段を登れば茲に伊香保神社あり其の石段の麓より湯澤の左岸を經て湯元及び榛名道あり湯元へ至る山道の右の方には挽物細工其他の土産物を賣る家建ち連なり谷を隔てゝ向山の麓に岩崎の別莊を望み三伏暇くが如き熱き日も此處に至れば汗立どころに乾きまだ來ぬ秋の茲に隱れ居るかと疑ふ程なり、温泉宿の大なるものは木暮金太夫、木

暮武太夫、村松秀茂、島田多朔、千明はる、石阪惠十郎、塚越七平、岸權三郎、福田與重、森田秋三郎の十軒にして之を大家と稱し其他

福田善十郎、森田喜三郎、齋藤仙助、茂木忠藏、一倉半平、大島甚右衛門、横手信太郎、半田飯七、馬場友七、新里うめ、中澤歌吉、金田辰藏、森田昌太郎、木村貞次郎、萩原清四郎、都丸要吉、町田市太郎、金井市太郎、宮下守太郎、大塚政五郎、萩原龜太郎、宮田ひろ、田中傳八郎、梅村辨次郎、眞淵熊藏、中澤五郎平、松田太三郎、齋藤宇之助

等數軒ありて皆家屋の大小疊數の多少に依りて等級を分つ其内にて木暮兩家、村松等には土藏造りの西洋室を備へて洋食をも料理し且つ一人入り特別浴室等の設けもあれば外國人の宿泊に差支なく其の一日の宿料は凡そ二圓五十錢より三圓五十錢迄の間に在り、伊香保の温泉宿も亦他の温泉場と同じく座敷の善惡、薄團の絹と木綿の違ひ等にて宿料席料に區別あり今は木暮金太夫方の定めを聞くに座敷料、薄團損料、賄料、入浴料等を混じ一人一週間の宿料は一等七圓、二等五圓、三等三圓五十錢、四等二圓五十錢、五等一圓五十錢の等級あれども客の方にても一番氣安

く宿屋に取りても世話のなき一法は既に熱海の部にも記せし如く、先つ其の温泉宿に至れば自分が望みの座敷を見立てゝ座敷料を何程と定め置き日々の食物は己の好む品々を時々注文するにあり然すれば宿賄ひにて己れの好まぬ下物を出され據ころなく別に一二品を誂へ無益なる散財を重ぬるよりは却て經濟に當る事もありて萬事都合宜しからん又日本人の癖として斯る保養の遊び場所に至れば其席料などを聞くを耻のやうに思ひ數日間逗留の後ちイザ勘定といふ時に及んで意外に金高の上りしに驚く事もあれど最初より席料は何程、蒲團損料は何程と云ふ事を問合せ置かば此悔は無き譯なり、編者は温泉宿最負にはあらねど夏一季の儲けにて殘り三季の暮しを立て魚類、肉類、菜蔬の類まで馬の脊人の肩を假りて取寄する温泉場に在りては多少物價の高きを當然の事なれば先づ其の宿屋に到らば豫じめ席料蒲團賃等を問合せ置き而して後ち奢るべきは奢り儉約すべきは儉約し唯だ其分に應じたる遊びを爲すを暑を避け病を養

ふの本意とも云ふべき乎偖此地の温泉は市街より南の方凡そ八町の溪間より湧出し湯元にありては温度華氏の百二三十度なれども樋にて各温泉宿の浴室に導くを以て其の途中にて温度冷め内湯にては百十度内外即ち適宜の入り加減となれり大抵の温泉宿には浴室四五箇所もありて孰れも竹の樋より瀧の如く浴槽に落ち其餘りは溢れて市中の溝に出で集まりて一つの流れを爲し其下は水車にかゝるを都て六箇所若し長明に筆を採らせなば温泉の流れは絶えずして而も元の湯にあらずとでも書くべき晝夜溢れて淀まざれば其の新しくして清潔なるは云ふ迄もなく色は少しく赤土色に濁れとも臭氣なく泉質は純粹なる炭酸泉にして胃弱、僂麻質私、白帶下、月經不順、貧血症、皮膚病、神經痛等の病症に効驗ありと云ふ市街の中央に鑛泉取締所あり浴醫森本某氏常に同所に詰合ひ居りて何時にても浴客を診斷し又按摩物賣等の客室に入り來る杯は他の温泉場と變る事もなけれと十時以後は此の物賣等を座敷へ通さゞるは客に紛失物

等のなさやうにとの宿屋の注意より出でしものなりとぞ、例に依り此地より一遊すべき近傍の名所を記載すれば

物聞山　は伊香保市街の東南に聳えたる小山にして俗に金比羅山と云ふ鹽藻草、秋の寐覺等に物聞山は上野とあり和漢三才圖繪に物聞山は伊香保に在りと見ゆ又上野志、名跡考等には伊香保の東南松樹蓊蒼たる山なりとあり依りて金比羅山の本名なりとす此山の中腹に登れは伊香保全市街を眼下に見おろし眺望絶佳、所謂伊香保八景の一にして夫木集に「伊香保なる物聞山の郭公にごらぬことに聞ゆなるかな」と伊勢の詠出でしは即ち此山の事なり

船尾山　は伊香保より高崎に至る街道の西の方にあり昔し此山に傳教大師の開基せし巨刹ありしとて今猶は山の南腹に其の遺跡あり又山の東北に尾船の瀧あり絶壁より落つるを直下二十丈、幅二間ばかり水烟四散して近づく可からず此瀧は瀧川邊よりも遠望し得べくして其狀白布を懸け

たるに似たり下流を瀧の澤と云ひ東に流れて利根川に入る、柏木より伊香保へ赴く道路は此瀧の澤を渡るなり其路ある處より瀧まで澤の奥凡そ二十町程もあるべし

御影の松　は伊香保より澁川路を下るを一里許なる路の右側に在り此事は既に伊香保道順の内に記したれば略す

箕輪の城趾　は船尾山の南、東明屋村にあり又簑輪とも書けり城は大永年中長野伊豫守信業の築く所にして其子業政之を守る弘治永祿の間武田信玄此城を攻むるを五年を歴れども業政能く防ぎて之を卻く永祿四年業政歿して右京太夫業盛尋で之を守る時に武田勢大擧して之を攻め終に此城を陷いる後ち武田氏より澁川氏、北條氏に屬し天正十八年に至り德川氏井伊直政を此の城主となし後ち直政高崎に移りて此城を毀てり今猶ほ其の堀櫓、外郭等の跡ありと云ふ

ガラメキ温泉　は相馬ヶ嶽東南の麓、西明屋村にあり泉質未だ詳らかならず諸瘡、火傷等によしと云へり温氣甚だ薄きが故に火にて沸し用ふ、

ガラメキは伊香保温泉より凡そ三里半、高崎に到る途の中程にあり

二ツ嶽蒸風呂　は伊香保の南二十四五町の處に在り山麓の砂地より蒸氣を噴出し其の熱度は百十度より三十度に至る、茲に屋根を覆ひ四方を密閉して體を蒸す其質は詳かならざれども硫黄の氣甚だしく閉づるを稍久しければ動すれば絶息するをあり依て近年は屋根の上に氣孔を穿ち又別に家を造り頭部を其上に出し身體のみ蒸す者あり今其傍らに二三の浴舍あり伊香保の浴客一日の運動として茲に來る者多し

◉榛名山　（榛名神社）

榛名山は上毛三山の一にして山中奇勝多し故に伊香保に到りて榛名に遊ばざるは猶ほ寺を尋ねて本尊を拜まざるが如く又博物館に入りて參考品を見さるが如く旅客に取りて遺憾多かるべし、伊香保より榛名神社まで

里程二里二十五町山道なるを以て駕輿の外は馬、車を通ぜず但し男子ならば伊香保より案内者を雇ひ徒歩にて行く方却て途中に名所を探るの便利あるべし伊香保より湯澤の左岸を上り行くと四五丁湯本道より右に岐れて橋を渡り茲より嶮しき山道に差掛るに道はS字を繋ぎ合せたる如く右に折れ左に曲り凡そ半里にして二ッ嶽蒸湯の岐れ路に出づ茲より西南を望めば男嶽女嶽(所謂二ッ嶽)見上るばかりに聳ゑ女嶽の麓に蒸湯ありて遙かに宿屋の屋根を認む、途を右に取り猶ほ登ること半里にして痩胸峠に出づ前には平坦なる伊香保平を隔てゝ小富士の背面を望み左には相馬ケ岳、右には高嶺を擁し遙かに後を眄みれば赤城の峯雲を凌ぎて四面皆な青々たる山また山なれば身は已に仙境に入りしかと疑はる是より行先一里ばかりは伊香保平の名に負かず新道を原野の中に開きて平坦砥のごとく凡そ二十町の處に至れば左手摺碓岩の溪間より遠く駿河の富士を望み伊香保の小富士と相對して眺望亦た佳なり又十餘町にして漸く伊香保

沼の左岸に出で小阪を登れば即ち天神峠に達す抑々伊香保沼は古へ伊香保村に屬し寛文年中より榛名に入り榛名湖又は榛名の神の御洗水と稱す東西十一町五間、南北十七町十二間西北の岸は吾妻郡に屬し湖水の下流は吾妻川に入れり沼の三方は皆山を環らし東の岸のみ遠淺にして伊香保平に續き其汀に菖蒲あり夫木集以下の選集に伊香保の沼のあやめ草と詠みしをもて考ふれば年毎に花こそ咲き變れ其種はいと古き物なるべし、小富士又は伊香保富士は沼の東北の岸に聳え形ち略ぼ駿河の富士に似たり其麓に一畚山といふ小山あり往古鬼人一夜にして此沼と富士とを造りしに其功一簣を缺きて空しく夜明ければ其の一簣の土を覆へして去りぬ一畚山即ち是なりと個は土人の妄説にて採るに足らねど筆の序に記し置くのみ、烏帽子ケ嶽は沼尾川を隔てゝ沼の北岸にあり冠山或ひは加々鞠山とも呼べる由なれども沼の方より見れば形ち風折烏帽子に似たるをもて然か名づけしものとぞ又鬢櫛山も形ちの似たるより名け硯ケ嶽は頂上

に大岩ありて其面硯を立てたるか如く見ゆるとて何時しか今の名を負はしける由偖神天峠とは古へ伊香保榛名の村界にして峠に榛名神社の大華表あり先年峠の茶屋より出火せし時笠木の湍を焼きたりとて猶ほ黒く燻りたる痕を存す此峠より眺むれば南に榛名の山々を望み北には湖水の澄みて鏡の如きを見おろし風雅心なき者すら茲には猶ほ杖を止めて其の景色を賞せざるはなし、此處より榛名神社まで下り道十八町、天神峠より榛名へ下るには新舊二筋の道あり榛名の山々は行先の右手に連なりて或は高く或は低く古松老杉はいやが上に生茂りて木蔭涼しく盛夏の時とても猶ほ足の進むを覺ゑず萬葉集に伊香保の榛原と詠みしを思へば此邊昔し榛の木多かりしより山を榛名とは名けしものにや行くこと十町餘谷川を隔てたる對岸にツヾラ岩といふ奇巖あり高さこと三十丈ばかりにして其形ち頸長き猿の如し伊香保誌には葛籠を數積上げて今や崩れんとするものに似たりとて葛籠岩の名を負はせたれど寧ろ九折の字を用ゆる方妥

當ならんと余は思へり夫より數町にして榛名神社の裏門に達し門に入れば奇巖怪石さま〴〵に並び立ち且老樹は蓊鬱として大陽を覆ひ溪水は潺〴〵として暑さを流し門を入れば早くも夏を忘るゝの心地せらる榛名神社は近地の鄕社にして古へは山に三千百坊を有せしとか慶長十九年當山法度の御朱印を南光坊より遣はされ幕府の頃に別當金剛院東叡山に屬し神威も殊に高かりしが今は神官の守る所とはなれり本社には彥由支命を祭り創建の年月社傳ともに詳らかならず本社に登る石段の石に江戸本所鹽原多助と彫付けあり落語家圓朝の話しにて耳馴れた人の名をかゝる山中に見るは何となく床しく覺ゆるも可笑し石段の中途に神輿殿あり又登れば雙龍門あり棟は八棟にして椽に龍を彫れり其傍らに柱の如き大岩屹然として立つ是を鋒ケ嶽と云へり其外社地は都て巖石を切開きたるものと見にて諸處に巨巖大石突兀として立ち並び其奇なるを云ふばかり無し蓋し天工と人工と相俟て始めて此の奇景を造出せしものにやあらん、雙龍

門より右折すれば即ち本社及び拜殿に達し本社の後にも亦巨巖空を衝て聳に其形ち略ぼ人體の如く首あり肩あり唯だ手足なきのみ是を御姿岩と云ひ頂上に幣を立てゝ神とし崇め祭れり又本社拜殿は彫刻に丹朱金銀の彩色を施し今は其色錆たれども昔しは如何に綺羅びやかなりけん思ひ遣られて最と懷かし、再び元の道を歩み神橋、三重の塔、御秡橋等を經て隨神門に至る途中溪を隔てゝ鞍掛岩を望む其形ち天然の岩橋の如く又馬の鞍に似たり、隨神門を出で唐銅の華表を潜り石段を下れば榛名山村に出づ戸數二百戸ばかりにして名物の蕎麥を鬻ぐ家多く又舊御師の家一宮二宮などゝ稱へて町の兩側に在り此御師以前は三十六戸ほどもありしが今は大に其數を減じたり避暑の爲め逗留する者又は一泊せんとする者は孰れも此宮に宿るを常とすれど中には家傾き柱曲み庭には苔むして僅かに昔し盛んなりし時の面影を殘せる家も多し却説伊香保より此地に遊ばんとするものは五六里の山道を徒歩する覺悟にて草鞋穿にて出立つ歟又

は最初より伊香保往復の駕輿を儆ふが善し开を如何にといふに榛名より高崎停車場へ出んとするにも猶ほ室田村まで三里の間は人力車を通ぜず且榛名村には駕輿至つて少く寧ろ皆無の姿なれば茲より室田までは是非とも歩行かねばならず又室田まで赴かば人力車必す有りとの受合も爲し難く事に依らば安中又は高崎停車場まで歩行き付けぬばならぬ事もあるべし（室田より高崎まで一人曳四十錢、安中まで同く三十錢）幸ひにして高崎への返り車を室田にて雇ふをを得ば重疊なれども一村の人力車は僅かに六七輛に過さるを以て時に依りては出拂ひになりしと聞き大に失望する事もあれば茲に吳々も旅客に向ひ注意を促し置くになん

◉澤渡温泉

澤渡温泉は前橋停車場を距る西北十一里廿五町上野國吾妻郡上澤渡村に在り前橋より澁川までは前記の鐵道馬車に據り澁川より途中中之條まで

五里半の道に乗合馬車の往復する事もあれど發着の時刻甚だ不規則にて乗合少なき時は發車を見合す等の事もあれば最初より人力車を雇ふ方宜しからん其賃金は澁川より澤渡まで八十五錢より壹圓迄（中之條まで五六十錢）道順は金井を經て南牧に至り北牧との間にて吾妻川を渡り夫より小野子、村山、市城等を過ぎて中之條に到るの間山道は概ね吾妻川の北岸に沿ひ且始終上り阪なれば峻岨なる處は時々車より下りて歩行せざるを得ず中之條より原村に到る途の中程より北に折れて行くを二里弱にして澤渡に達す去れと伊香保より此地に赴かんとするには湯中子を經て加々摩利山の北峯を越に五町田を經て澤渡道に出るを近道とす（但し人力車を通ぜず）澤渡の地たる三方皆山を以て圍まれ東南の方少しく開けて近く四萬川を接す素より山間の一村落に過ぎずして左のみ見晴しよき土地にはあらねど海面より高きを凡そ二千二三百尺の上にあるを以て山氣肌を襲ひ暑中と雖も寒暖計は八十度以上に昇らす夜に至れば六十度以

下に降る等あり泉質は硫黄泉にして專ら病後の衰弱を治し胃病、腺病、皮膚病、黴毒等に効驗ありと云ふ温泉宿は福田みき、福田六右衛門、福田喜八郎、關總吉、關口十郎の五軒にて此外二三軒の小料理屋もあり宿料は通常一日二十錢より三十錢まで、席料、賄料、入浴料等を合せて一週間の費用は一圓五十錢より二三圓位迄にて諸物價は僻地の割合には貴からねど牛肉牛乳等は得るを難しと云ふ

◉四萬温泉

同郡四萬村にあり中之條までは澤渡と同し道を取り澤渡道の中途より岐れて四萬村に入る前橋より里程十三里十二町、中之條よりは四里七町、村の入口に山口温泉といへるあり個は近郷近在の者農業の暇來りて浴する所にして戸數十四五軒ばかりもありしが先年火災に罹り温泉宿村田平八外商店四五軒を殘して其餘は悉とく灰燼と化し去りしと云ふ、茲より

溪流に架けたる小橋を渡れば即ち四萬温泉場に達す土地の人は此湯を新湯と稱へて山口温泉と區別せり戸數は二十戸ばかり中に就て温泉宿田村茂三郎（小倉屋）關善平の二軒最も手廣にして客間各々五十室以上を備へ孰れも内湯の設けあり、温泉は鹽類泉に屬し効能は皮膚病、傴麻質斯、挫傷等より生ずる關節の痛み胃弱、貧血症等に宜く胸はり、胸痛み、食物不消化等には朝夕此の鑛泉を服用するを善しと云へり、四萬より溪流の岸に沿ひて昇り行くを數町の處に日向温泉あり戸數僅かに二戸あるのみなれど前に水晶山を望み近く大泉小泉の瀧を控へ土地頗る閑雅なれば四萬より散歩かたゞ〳〵此處に遊ぶ者多しとが、四萬温泉場は中央に新湯川の流れを挾み關、田村の兩家とも優劣なきが中にも田村の本家稍や眺望に富めり同家宿料の定めを聞くに上等旅籠料晝食とも一日金五十錢中等同く三十五錢並は廿七錢より廿二錢まで、席料は八疊の座敷にて一週間特等二圓五十錢、一等一圓五十錢、二等一圓二十錢、三等八十錢、

四等五等は合客を雜居させるものにて一日一人に付三錢五厘より二錢五厘まで、夜着蒲團は一夜六錢より一錢までの差あり又此地近傍の名所は小倉瀧、摩谷瀧、蠟石山、水晶山、大泉、小泉の瀧等にして皆一顧の値ひあり

◉川原湯温泉

前に掲げたる四萬温泉道の途中中之條より岐れて原村を過ぎ猶ほ行くを三里足らずにして岩島村に達し茲より一里行けば川原湯温泉場に到着すべし中之條より岩島村まで一人曳人力車賃五十錢、岩島より先は道稍や嶮しければ足弱の人が病人を除くの外は歩行くを善とす若し駕輿を儲ふとも其の賃金は廿五錢の上に出ざるべし温泉の性質は硫黄泉にして少しく臭氣あれど皮膚病、腫物等に頗る効能ありとて態々此地に赴く者も少からず湯口は大湯、瀧の湯、目の湯、百々湯、笹の湯等に分れ虎の湯は

温泉元萩原愼太郎方の亭内に在り、此地の温泉宿は右の萩原を始めとして樋田宗七郎（升屋）樋田又平（山本屋）豐田道藏（柏屋）等の四軒、料理屋は柏屋、高田屋、林屋、中屋等の四軒孰れも正業を營むものにして彼の曖昧なる達摩屋にはあらず、萩原方の宿泊料は一日一人に付一等五十錢、二等四十錢、三等三十錢、四等廿五錢を定めとす但し他の三軒にては一日四十錢を上等とし下等に至つては二十錢位にても泊める事あるべし又た此地より澤渡へは二里草津へは四里なり

◉草津温泉

信州淺間の火山脈蜿蜒東北に走り其の凹處に於て温泉を涌出す草津温泉も亦其一なり、別當光泉寺の温泉由來記を按ずるに古へ元正天皇の御宇養老年間大和菅原寺の行基尊者東國遊歷のとき藥王如來の示現に依りて當山に登り初めて此の温泉を發見すと又建久年間源右大將頼朝淺間山に

獵する時分營を上毛三原に置き狩を了りて後ち近傍山野を跋渉し偶ま此地に來りて温泉を得たり公乃ち此地に露宿して屢〻鑛泉に浴し後ち上毛の鄕士細野幹久に湯本の姓を賜ひ以て此の温泉を守らしむ公の浴せし温泉を御座の湯と云ひて今猶ほ町の中央に在り其泉源の側らにある石を御座石と名け石上源公の小祠を安す、降りて天正十五年の夏近衛龍山公此温泉に浴し醫王堂前に於て和歌を詠じ文祿四年豐太閤も亦此に遊ぶの企てありて既に先觸を發したれども軍務に遑なかりしを以て事終に止みぬ又寛保年間德川大樹試浴の命あり仍て鑛泉を遠く江戸に輸送せし事ありと是れ温泉由來記の大略なり、草津は上毛東北の極端に在りて吾妻郡に屬し信濃上野の州界を距る三里許り、地は擂盆の狀を爲して四方丘陵を遶らし海面を抽くを凡を四千五百尺季候清冷にして三伏の候と雖も亦人間に苦熱あるを知らず所謂高嶽氣候の療養に適するものなり、温泉の湧口は數ヶ所あり就中最も大なるを御汲上の湯と稱し村の中央にありて東

北に面し湯壺は縦横凡そ五間ばかり其の前面より温泉滾々として噴出し晝夜歇む時なし即ち瀧湯の源泉なり之に亞ぐ者は御坐ノ湯、熱の湯、和志の湯、地藏湯、湯の澤、西川原等にして其他各温泉宿の庭前に涌出するもの許多あり、泉質は強酸泉にして温度は百四十二度を保ち痼疾、經久黴毒、先天遺毒、液血變敗等の性に特効あり而して多量の硫酸を含むが故に病性に依りては其の効驗殊に著明しけれども無病健康なる人には酸性の強さが爲めに往々湯中と稱する浴熱病に罹り輕さも眩暈、頭痛等を發し又ブランドラシヤ、セルフリスと稱する一種の浴疹を發する事あり故に初めて此の温泉に浴する人々は宿屋の主人に問合せて最初より強酸の湯に入らぬやう注意すべし（温泉宿には是等の人々の爲めに適宜の眞水を交へて其成分を薄らげたる浴槽を備へあり又強酸の湯に入る時は番人ありて入浴の時間を定め其の時間を過ぐれば出浴を促す事あり）偖此地は前にも述べたる如く山間の低地なるが故に其の眺望に於て左の

み賞する程の事もなけれど古へより名高き温泉地なれば舊記等も少なからず村家は屢々火災に罹りて其建築を改めたれど猶は數代打續きたる舊家多く温泉宿を始めとして料理屋、貸本屋、大弓店、散髪床、新聞縱覽所等皆備はり郵便局は旅館黑岩忠四郎方にて取扱ひ毎日二回の集配を爲し凡そ旅客の逗留中其の消閑の具には差支へある事なし草津温泉の宿重なるものは

黑岩忠四郎　一井善三郎　湯本柳三郎　中澤市郎次　山口奉八郎
市川久三郎　新納伊三郎　桐山　二平　富永德二郎

等にして孰れも客室數十室を備へ食類は僻村の事とて海魚には乏しけれども鰻、鯉、鮒、鮎、鷄肉、牛肉、小禽類には事を闕かず其の宿料は一夜二十五錢以上六七十錢まで、一週間二圓以上五六圓迄を限りとすれども此地にても亦手賄ひの法を行ふを自由なれば長く逗留する者は座敷蒲團等を借て自賄ひをなす方經濟なるべし又此他近傍の勝區を擧ぐれば

白根山　草津より西凡そ三里許り志武嶺越の半途より左に岐れて登る絶頂は海面を抽ること六千五百尺山頂は凹形を爲し底に三坑ありて中坑常に熱泉沸騰し且絶えず烟を吐きて信州の淺間山と南北に對峙す頂きより眺望すれば信、甲、野の巒峰は一眸に集まり來り各市街村落は指顧の間に在りて風光明媚亦一個の仙境なり

常布の瀧　は志武嶺の途上にあり南面にして二層に落下す高さ凡そ百二十尺其狀白布を懸けたるに似たる故に此名ある乎、堯惠法師が「世に知らぬ布ならなくに山姫のいかに晒せる瀧の白瀧」と詠みしは此瀧なり○

園山　は吾妻郡の鄕社白根神社の社地にして納涼觀月に最も宜し社は日本武尊を祭り神號は一品有栖川宮殿下の御筆なり此社は古き神社にして上野國神名帳にも從一位白根明神と見えたり○**氷谷**　は浴場より西ノ方半里許りを隔てたる山間の巖穴にして穴の中常に堅氷を藏し盛夏の候に至るも猶ほ嘗て融解せず故に此名あり○**毒水**　は源を白根山に發し

山麓を迂回して澁嶺越を横斷せる水流の名にして古來毒水と言傳ふれども之を飲みて斃れたる者あるを聞かず群馬縣廳の分析に據れば此水は多量の硫酸を含み鑛泉として用ふべしと雖も飲料として用ふべからずとあり西岡某氏近頃此川の傍らに建碑の企てありと云ふ

◉藪塚鑛泉

草津とは方角違れひなど同じ群馬縣の内なれば筆の序に讀者に紹介すべき温泉あり日本鐵道會社兩毛線の大間々停車場より南一里二十町人力車賃二十錢を拋ち給はゞ一時間にして藪塚鑛泉場に達すべし、藪塚は上野國新田郡に屬し後に小高き丘陵を遶らし前には限なに蒼田を見晴し鑛泉は炭酸泉にして泉源は温泉神社石段の麓より湧出し之を巖理泉と云ふ鑛泉宿は今井樓と稱し樓廣濶數十の客室を備へ鑛泉を館内に導きて冷温二樣の浴室あり、同家の宿料は一夜二十錢以上四十錢までにして魚類は

常陸海岸より汽車にて送り來るものを用ひ牛肉、雞肉、牛乳にも亦事を闕かず近來桐生よりの新道開けたるを以て夏時浴客雜沓を極むと云ふ又此地より後記の長岡鑛泉場まで僅かに二十町、人力車に八錢を賃すれば半時間にして往來するを得べし

◉長岡鑛泉

此の鑛泉場は桐生停車場より切通しを經て南の方僅かに一里半、新田郡西長岡村に在り去る明治廿一年始めて鑛泉の分析を東京衛生試驗所に請ひ小川爲太郎なるもの玆に一の鑛泉浴場を開さぬ長生館といふは即ち小川の新築せし旅館にして館内に温冷二樣の浴室を設け亭園頗る廣くして土地も亦自から閑靜なり長生館定めの宿料は一等一夜三十錢、二等二十五錢、三等二十錢、四等十七錢（晝食を除く）にして入浴料は一日三錢又此地への人力車賃は桐生小俣の兩停車場より各〻廿五錢づゝ大間々

停車場よりは廿三錢なれば旅客の都合に依り此の三停車場の内孰れにて下車するも損得なし、西長岡より僅か五町を隔てたる處に御所山と云へる山あり昔し惟高親王の住はせられし長岡の宮の舊地なりと言傳へ風景よろしき地なり又金山といふは新田義貞の舊城趾にて西長岡を距る二里半山頂には新田神社あり義貞の靈を祭れり曾て　皇后　皇太后兩陛下葦狩として行啓あそばされしは即ち此山なり

◉高津戸急流

夏日桐生に遊びし者は高津戸の勝景を說いて止まず高津戸は桐生町より東北一里二十五町（人力車賃十五錢）渡良瀨川に臨みたる高崖の名あり斷岸絕壁に橋を渡す橋に立ちて兩岸を望めば水深く岸高く巨岩は苔滑かにして色愈〻綠に古松は枝低うして姿殊に奇なり高津戸は元と山田七郎吉之の居城ありし處なりしに桐生氏の爲めに亡され後ち里見隨見、同平四

郎等之に住みしも天正六年新田氏の爲めに亡され今は唯だ風色を愛すべき處とはなりぬ、高津戸より行くを四五町にして羽根瀧あり渡良瀬川の足尾より下りて一屈曲をなせる所より落ち水勢奔激兩崖に觸れて石を皷するの音は宛然遠雷を聞くが如し毎年七八月の頃はひ鮎魚の瀨を登らんとするを待ちて漁夫は岩の上に跨がり竿網をもて魚の跳ね躍らんとする者を捕ふ其技實に妙にして鮎の味ひも亦佳なりしが近來は足尾製銅所より流れ來る銅澁の爲め大に鮎の繁殖を妨げしは惜むべき事なり、高津戸には旅亭なし故に桐生若くは大間々より日歸りを爲すを善とす

◉赤城山（赤城神社）

赤城山は大間々停車場より西北五里三十町、前橋より東北六里二十五町の處にあり（妙義、榛名、赤城を以て上毛の三名山とす）東京より赴く人は前橋にて瀧車を下り同所より小暮まで人力車を驅り夫より徒歩にて

登山すべし小暮より頂上まで猶ほ四里餘、阪路嶮くして登り易からず行くこと二里餘にして右に硯石山、左に鍋割の峰を望む鍋割は赤城五嶽の一なり又一里餘にして右に小沼を望み二十町にして大沼の岸に到る大沼はまたの名を石垣沼と云ひ新勅選、拾遺集にも其名見にたり沼の廣さは周圍壹里三町、東西十五町南北十町其水清くして鏡の如く毎日冬季此地にて氷を製し初夏の頃盛んに前橋地方に切出す、其の下流を沼尾川と云ひ津久田村の北にて利根川に灌ぐ、沼の南に赤城神社あり大己貴神、豊城入彦命を祭ると云ふ又近傍に牧馬場、牧牛場あり此頂さに達すれば四望眼界を遮るもの無く風光絶奇夏日に至れば登山する者頗る多し

◉磯部鑛泉

上州にて近來俄かに其名を揚げたる磯部鑛泉場は同國碓氷郡磯部村に在りて東京よりは行程三十餘里、山駕輿に胴を屈め輕尻馬に腰を痛めし昔

しならば三日以上の旅路なれども一條の鐵路相通じ瀘車の往復いと繁き今日となりては僅か四時間にして坐ながら磯部停車場に着し得らるゝを もて却て東京片隅の温泉場へ赴くよりも手輕なり同所が斯く繁昌に至りしも多くは鐵道のお蔭に依りしものなるべし、上野發の瀘車に乗り高崎にて車を乗換へて磯部停車場に至る下等の賃金は九十一錢、同停車場を下れば各温泉宿の出張所ありて客の手荷物等は温泉宿の若い者之を携へて我家に導くなど至極便利なれど若し猶ほ車を雇ふとも各温泉宿への距離は近きは二町遠きも三四町に過ざれば其の賃金は平均僅か三錢を以て定めとす、此地鑛泉の由來は詳らかならざれども近くは文久二年大手萬平(今の鳳來館)温泉の諸病に効あるを見て茲に浴場を設け次で明治六年土地の有志家は温泉の分析を舊熊谷縣廳に願ひ出で其の成績に依り始めて泉質の獨逸國カルヽスバットに相似たるを知り明治十七年東京下谷鶯谷に温泉の出張所を設け又根津に出張温泉場をも新設せしかば本元な

ゝ磯部村も漸く世の人の爲めに知られ且近年井上伯を始め五六の紳士等茲に別莊を建てゝ繁昌を添へしにゞ其名は終に伊香保と併べ稱せらるゝ迄に至りぬ、唯だ避暑一方の上より云へば磯部は伊香保の如く土地高燥なるにもあらず霧積の如く山色幽雅なるにもあらず風景に於ては大に右の二ヶ所に劣れども北には碓氷の流れ清く西には妙義の峰高くして風色を補ふあり土地の低き割には濕氣なくして空氣も亦た清良なれば夏冬ともに浴客絶にずと云ふ、鑛泉場は市街の中程にありて其の取締事務所を濟生社と云ひ又た其の傍らに温泉場を設け一人前一錢五厘の湯錢を取りて何人にも入浴せしむること猶東京の洗湯の如し、此地の温泉宿は鳳來館(大手萬平)三景樓(夏目ぬひ)(對岳樓)(林益造)山城軒(城田代吉)信泉亭(小島彦總)の五軒にして外に料理屋、鰻屋等もあり、鳳來館は濟生社より西へ突當りたる處に在りて三層樓は入口右の方に峙たち家居頗る手廣なり同館の宿泊料等を記せば旅籠料は上等一夜廿五錢、中等廿二錢、下

等十八錢（晝食は六錢より十五錢まで）席料は六疊敷一等一日廿一錢より下等同じく九錢までの差あり浴室は各温泉宿とも孰れも一二ヶ所を備へ且多くは温冷二槽の區別あれども元來磯部の鑛泉は冷泉なるが故に各温泉宿にては一荷何程と價を定め之を浴槽に汲入れつゝ薪を焚き炭を燻らして煖め沸すを概ね東京ありふれの温泉に異ならず若し此地の鑛泉にして天然の温度を保つものならんには猶ほ一層の快味を感ずべきに最と最と口惜き事なり、浴醫には堀口某氏ありて市街の西南なる阪の上に磯部醫院といふを設け親切に入浴患者を診察し別に東京鶯溪醫院の分院等もあれば醫師には不便を感ずるをなく警察署、郵便局等も皆備はり電信は鐵道停車場にて取扱ふなど萬事稍や便利なれど元來磯部は近年開けたる土地なれば浴後逍遙するに宜しき名所、舊跡、遊園地の類に至ては甚だ乏しく地勢風景孰れの點より云ふも磯部は他の温泉場に劣るとも優りたる廉とては無きに何故一時に其名を揚げたるやと問はゞ开は唯だ其の鑛

泉が病症に依りて特効あると土地は停車場の傍らにありて浴客の來往便利なるとに據るものと答ふべきのみ然れども近年海水浴大に流行するに連れて此地も漸くさびれ行かんとするの傾きあり又此地より近傍各地への里程を擧ぐれは高島へ五里、富岡へ二里十町、一の宮へ一里二十町、板鼻驛へ二里十五町、妙義町へ二里にして右の内妙義山へ登るには松井田停車場より濠車を下り同所より人力車にて赴くも好けれど磯部より直ちに人力車を走らする方道順なるべし車賃は磯部より妙義山阪下まで一人曳十六錢なり、又例に依り磯部近傍一顧の價ある舊跡等を擧ぐれば

佐々木盛綱城趾　は磯部温泉場より東南十町字城山と稱する所に在り建仁年間佐々木盛綱一城を築きて茲に居る其の城趾は高さ十餘丈周圍七八町、頂上は稍や平坦にして樹木繁茂し微かに其の遺趾を存するのみ明治廿一年磯部及ひ鷲宮村の有志者謀りて一の遊園地となせり

佐々木盛綱の墓　は磯部温泉より東十餘町上磯部村磯明山松岸寺庭内に

在り墓は二基にして其形ち兩ながら相同じく高さ各々三尺五寸其稍や大なる方の石塔中圓き處と臺石とに梵字を彫り其の左右に數字あり正應六年四月日の七字のみは微かに讀得らるれども其他は磨滅して讀下し難し今は其周圍に石を積上みて垣とし又樹木を植付けて稍や風致を增せり蓋し勇士の跡を猶ほ後世に傳へんとて磯邊近村中意ある人々の義捐より成りしものなるべし

大野九郎兵衛の墓　は同しく松岸寺地内にあり九郎兵衛は淺野の家臣にして芝居に演ずる斧九太夫の事なり九郎兵衛は赤穗城明渡しの後ち磯部の鄉に居を卜し子供を集めて手習を敎へ以て其日の活計を營み居りしが寛延四年九月に死去し此寺に葬られしと云ふ磯部には今猶ほ九郎兵衛の臨本を所持する者あり其墓は高さ二尺餘の自然石にして表面に慈望遊謙靈の五字を彫りたり

仙石の碑　は停車場の西一町餘の處にあり磯部村は元と仙石因幡守の領地なりしが土地水利に乏きを見て仙石公自ら土工を起し人見村字大王寺より碓氷川を分流して磯部村に灌漑し今猶ほ全村公の恩澤に浴す嘉永年中村民相謀りて公の功績を碑石に刻し稻葉大權現の尊號を贈り春秋二回其の祭典を行ひ以て公の靈を祭る碑文は龜田綾瀨の撰む所なり

横野　は人見村に屬し人見の原とも云ひ磯部を距ること十五町に過ぎず此の曠原は古へより菫の名所にして春至れば一面に紫を染出して頗る美觀なり萬葉集に「紫の根はふ横野の春の庭君をかけつゝ黄鳥啼くも」と詠みしは即ち此人見の原の事なりと云ふ

◉妙義山（妙義神社）

妙義山とは白雲、金洞、金鷄三峰の總稱にして群馬縣北甘樂郡に屬し南は諸戸村より三里、北は碓氷郡五料村より二里、三峰ともに渾て巖石より成り峰々突兀として鋒を立たるが如く滿山古杉老楓多くして四時の

光景に富み秋至れば紅葉岩間に映じて奇觀言ふ可からず、山の北麓にあるを妙義町といふ人家二百戸許り市街より總門を過ぎ老樹蓊鬱たる間を經て阪路を躋るを數町の處に鄕社妙義神社ありて日本武尊を祭る社殿は壯大ならずと雖も塗飾するに朱丹を以てし一見神威のいや高さを覺に四面には岩石聳え樹木茂りて幽邃極まりなし、金洞山は一に中ノ嶽と稱し山中殊に奇巖多きを以て名あり先づ妙義神社道の手前より左折して山道に掛れば阪漸く急にして道幅愈々狹く行くを十餘門にして中ノ嶽一の鳥居あり此處より信州の峰巒を見おろし又蠟燭岩を望む尙ほ登るを數町にして第一石門の中天に聳ゆるを見るべし石門の高さは何丈なるや測り知る可からず巨岸の中心に一大洞孔ありて天然の門閥を作す神槌鬼鑿も是に至つて極まれりと云ふべし是より阪路益々峻嶮にして攀づるを頗る困難行々第二石門に達す第二石門は第一石門の如く偉大ならずと雖も嶮は山中第一と稱せられ人は鐵鎖を手操りて漸く其下に到るを得べし次に第

三石門あり次に第四石門あり登るに隨つて道愈々嶮しく且岩滑かにして足掛りなければ健脚にして山路に馴れたる人と雖も第四石門より上へは攀ぢ登る者稀なりと云ふ、玆より麓の方に下るを二十餘町にして奥の院社務所あり其傍ら尖巖の屹然として聳ゆるありて其上に白幣を祭る此巖に攀づるを亦頗る危險にして石階の終る處路竟に極まり唯だ鐵鎖と鐵の梯子とに依りて漸く白幣の在る處に到り得るなり、偖此等の奇景を探らんとするには先づ瀘車にて磯部若くは松井田停車場に到り同所より人力車にて妙義町阪下なる旅館菱屋傳兵衛方に投じ同家にて案内者を頼み初日は白雲山に登り次日は金洞山に攀ぢ都合二日間を費して見物を終るべし菱屋定めの宿泊料は一泊下等二十錢、中等二十五錢、上等三十五錢にして案内者も亦其道の遠近に依て定めの賃金あり、又松井田停車場より妙義町まで里程三十八町人力車賃二十錢、同く中ノ嶽まで一里三十町（妙義町より先は車馬を通ぜず）松井田驛には酢屋德七郎外二三軒の旅店

ありて宿泊料は略ぼ菱屋と同様なり

◉霧積温泉

妙義山の參詣を終り松井田より瀛車に乘りて横川に赴き同所より西北二里半の山道(阪本驛より碓氷嶺を四五町上り夫より右に曲る)を上れば霧積温泉場に到るを得べし霧積温泉は何時の頃發見せられしものにや未だ其の由來を知らずと雖も去る明治二十年より玆に競ふて浴場を設くる者あり翌年金井之恭、佐藤虎清氏等相謀りて一の新道を開きしより以來其名は漸く世人の爲めに識られ貴顯紳士先を爭ふて此地に別莊を營み今は漸く世に知らるゝに至れり横川より温泉場までの人力車賃は一人曳三十五錢の定めなれども新道とは云へ其途は勾配稍や嶮しき處あり且修繕行屆かずして凸凹定まり無ければ最初より二人曳を雇ふが好し其の舊道は少しく近けれども車を通ぜず去れど初めより歩行かんとする人は此の捷

徑に據るも可なり既にして温泉場に近づけば谷間を潛る水愈々清く木蔭にそよぐ風益々凉しく道は右に折れ左に曲りて岩石の切通しを過れば忽ち左に一の遊園地を望み又行くと數十歩にして右に金洞の瀑布を望む玆より先は兩側に小家建ち並び長榮橋を渡れば即ち温泉場に達す、地は海面より高さを二千八百尺霧積川の清流は滔々として其中央を流れ山には斧斤曾て入りしを無きを以て老樹欝蒼として晝猶ほ暗く一點の山骨を見ず而して其の七八分は皆楓樹にして殊に奇なるは松杉の二種の一本もなきを是なり山中鹿多く栖み秋季に至れば出でゝ紅於を賞し坐して呦々を聽くべし此地の温泉は積霧川の上流溪谷の間より湧出し各温泉宿は樋を以て之を館内に導く、其の泉質は鹽類泉にして効能は僂麻質素、腸加答兒、皮膚病、子宮病等に宜しく別して創傷、挫傷、火傷等には其効驗著明しと言傳へ怪我人等の來り浴する者最も多し旅館は長生館(佐藤虎清)錦楓閣(芝大助)溪香館(脇谷三郎)等にして孰れも雅致あるが中に長生館

は向ケ岡と稱ふる小高き處を拓きて新築せしものなれば眺望殊に宜しく庭中には小瀑布あり噴水ありて一見既に涼を覺ゆるの心地せらる宿泊料は特等一夜七十五錢、一等五十錢、二等三十五錢、三等二十五錢にして宿賄ひ滞在費は食料、座敷料、蒲團料等を合せて一週間一等五圓、二等三圓五十錢、三等二圓廿五錢なれども客の好みに依りては座敷のみを貸して手賄ひを許すなど猶ほ他の温泉場に異なるをなし、霧積は新開の地なるを以て一の神社佛閣なしと雖も其の遊覽すべき重なるものは武尊、忍、背觀、鹿子の諸瀑布、八栗山、鞍懸山、蝙幅穴、遊仙峽等なりとす、

東京上野より高崎まで下等滊車賃七十六錢、高崎より横川まで同じく二十五錢同所より二人曳人力車賃を七十錢と見積るも東京より此地までの片道旅費は一圓六十錢の上に出でず而して上野を午前六時に發すれば途中横川又は坂本にて晝食小休みの時間を合せて午後二時までには霧積に着し得らるゝなり又此地より輕井澤まで二里、近道を行けば十餘町近し

横川より輕井澤まで七哩間の鐵道は日本鐵道線路中第一の難處にして傾斜十五分一の割合と以て嶺の方に昇るものなり故に鐵道の設計、機關車の構造も亦通常のものと異なりて獨逸のアプトシステムを採用せり先づ普通軌條の中央に鋸齒狀のラックなるものを設け機關車の内部にも亦別に齒輪車を取付け此の齒車はラックの齒を咬へつゝ昇降するの仕掛なり而して兩停車場僅か七哩の間に隧道の多きこと廿六個、其の最も長きものは一千七百七十二呎にして此廿六隧道の延長を合算すれば二哩半以上となり一隧道を過れば一隧道を迎へ乘客は半ば地下鐵道を旅行するの思あるべし、我邦にてアプトシステムを用ひたるは實に此の地を以て嚆矢とするが故に特に其の概況を茲に掲ぐ

◉輕井澤（附り碓氷嶺）

輕井澤は長野縣北佐久郡に屬し碓氷嶺の西、高原の中にありて四面皆な山を繞らし樹青く草芳しく遠くは淺間山萬丈の煙を望み近くは突兀たる釜戸岩、峨々たる離山に對し地層概して火石質なるが上に海面を抽くを四千尺に近きを以て空氣新鮮、飲水清良、乾燥其宜しきを得たり、川あり雲合川と云ひ驛の中央を流れ逍遙遊息以て夏日の永きを忘るゝに足る

此地東京を距る西北三十七里、高崎へ十二里、上田へ十二里、長野へ二十二里、諏訪へ十五里而して諏訪を除けば悉く瀘車の便あり、横川より輕井澤までの下等瀘車賃は一圓〇一錢にして午前六時に上野を發すれば正午十二時には輕井澤に着し少しも足を勞するに及ばず、驛中旅亭の名高きものは龜屋、萬松軒の二軒にして宿料は一夜二十五錢以上、一ヶ月五圓以上、此の好避暑地は早くも外國人の愛する所となり明治十八年以來年々往いて暑を避くるもの外人三百人に下らず比較的に其數內地人よりも多しと謂ふべし因に記す碓氷嶺は往時臼日又は笛吹と書し碓氷郡阪本驛に屬する聯峰の總稱なり横川停車場より西方凡そ四里霧積温泉の南に方り古來紅葉を以て其名高し、景行天皇の朝皇子日本武尊東征凱旋の時此山の頂きに登り東望して橘姫を追暴し嗚呼吾嬬者耶と嘆ぜられし處にして此を留夫山と呼ふ、碓氷荒太郎貞光も亦此の山中に生長して毒蛇を退治す留夫山の東北表白山の三蛇跡は即ち其の舊地なりと言傳へ貞光

の屋敷跡は表白山の美志の平に存す其他名所舊跡の類猶ほ多れけど煩繁しきを厭ひて茲には漏しぬ

◉淺間山

淺間山は日本有名なる活火山にして海面を抽く八千二百尺、信州北佐久郡に屬し追分驛の北、信濃上野の州界に跨がる頂上の火口より絶えず白煙を噴出す其の破裂は何年に起りしか未だ詳らかならざれども日本書記に天武天皇の白鳳十四年三月信濃國に灰降るとあるを以て最初の破裂とすれば白烟は今日に至るまで千二百年の間立ち續きしものなるべし宜なる哉古歌にも多くは其烟をたゝへ富士と共に我邦の二名山と稱するに至れり、偖此山に昇らんとするには輕井澤より人力車を驅りて追分驛に至り茲にて案內者を雇ひて草鞋、杖、笠を用意（山上に清水なし故に登山者は必ず飲水を携へ行くべし）して驛の東端より徒步山道に掛るを善し

とす、其道は追分ヶ原の荒原を過ぎて阪路に差掛り行くを一里赤瀧の下に達す赤瀧までの間は路傍に赤松其他雜草生茂り途も亦左のみ嶮惡ならざれども茲より登るに隨ひ山路崎嶇として層一層嶮を增し而も阪は勾配急にして屢々足を滑らし歩行頗る困難なり行々前掛山即ち淺間の支峰に攀づれば四望一の喬木を見ず火石焦土途を沒し且前面に噴烟の轟然中天を衝くを見るなど何となく物凄き心地を爲すと云ふ、追分より山道三里十町にして山巔に達す即ち噴火口の在る所にして俚人は之を釜といふ、噴口の直徑一千尺許り形ち漏斗の如く中より盛んに水蒸氣を噴出し其しぶき霧の如く降かゝりて近づく可からす、世に火山を以て火を噴き烟を吐くものと思ひ誤る人あれども實際は地中の水蒸氣熱して昇騰するものにして偶々其色淡黑に變ずるもあるは之に粉灰を交ふるが爲めのみ決して石炭薪等の燃料より生ずる烟には非ずと知るべし、輕井澤停車場より追分驛まで里程二里三十町、人力車賃二十錢なり

◉淺間温泉

信州に温泉數あるが中にも淺間、諏訪の二ヶ所は其名最も顯はる、淺間温泉は一名犬養の御湯とも呼びて松本町を距る凡そ三十町東筑摩郡淺間村に在り温泉湧出の由來は詳かならざれども淺間は元と麻葉野といひ萬葉集に「紅ゐの麻葉の野良に刈る草の束の間も吾忘れめや」とあるは即ち此處なるべし又昔し「鳥の子はまだ雛ながら立ていぬかひのみゆるはすもりなるらん」と物名にとりなしたる歌（讀人しらず）もあれば其の起因は最と故きを憶ふべし此地は元と今の上淺間一區のみなりしが寛保二年霖雨の時人家數十戸を押流しゝかば此水害に罹りし者今の下淺間に移住して上下兩區に分れ近くは明治十三年全村悉く類燒せしなど幾多の變遷を經來りて終に今日の有樣とはなりけり、上淺間は戸數百五十戸、下淺間は同じく百十戸土地高燥にして空氣清く東北に山を負ひ西南に田圃を見

晴し一體の景色は田舍めきたれども熱鬧に馴れたる都人士の眼には最と珍らしき心地す、温泉は單純泉にして無色透明無臭無味、温度は九十五度より百二十度の間にありて其の湯口は殆ど六十餘ケ所御殿の湯、枇杷の湯、翁の湯、御座の湯、柳の湯、松の湯、竹の湯、紅葉の湯、櫻の湯、蔦の湯、菊の湯、桐の湯、玉の湯、寶の湯、錦の湯、鶴の湯、龜の湯、目の湯、臼の湯等枚擧するに遑あらず其の主治効能は慢性僂麻質私、痛風、瘋癇或は創傷後の滲出物、神經痛、中風、依卜昆埃里、貧血症、皮膚病等に宜しく又其湯は前記の如く無臭無味なるを以て村民は朝夕の炊事に皆温泉を用ひ又常に之を飲用するに少しも清水と異ならず決して食物の味を損する事なしと云ふ以上列記せし湧口は孰れも温泉宿内湯の名にして此外に猶ほ外湯（合浴所）あり内湯は別に入浴料を取らざれども外湯は一浴五厘一日一錢の湯錢を拂ふを常とす、温泉宿は客席多きは二十四五室少きも七八室を備へ中には湯瀧を設けたるもあり今ま同地の温泉

宿を列記すれば

○石川佐源次　石川善司　○飯島傳十郎　○中野寛之助
○中野昇一　降旗元太郎　澁澤秀二　山本きた　鈴木嘉一郎　○幸田盈三
○石川幸吉郎　中野謙三　瀧澤武太郎　瀧澤友造　○赤羽忠九郎
○赤羽彌門　○二木袈裟三　○二木秀一　二本與一郎　○二木重平
○飯島藤次郎　○瀧澤國十　瀧澤滝次郎　○赤堀直十　小岩井與一
瀧澤祐吉　○宇留賀平内　二本端午　瀬澤瀬一郎　米岡良造
○宇留賀久佐　齋川金造　○瀧澤安太郎　瀧澤勇一　○瀧澤宇太郎
齋川米吉　○赤穗才八郎　○降旗庄吉　○山崎源一郎　飯沼爺吾
○中野逸次郎　○降旗權六　○甲崎武二郎　○山本勘吾　○三浦喜平次
小口湯足　瀧澤作五郎　石川源平　二木十次郎　西村爲吉
藤岡喜代三

（○印は料理屋兼業なり）

等にして旅籠料は一日二十錢より五十錢までの區別あれども下宿並にする時は一ケ月五圓ぐらゐにても逗留し得べく魚類は毎日直江津より運搬し且牛肉鶏肉等もありて物價は左のみ高からず暑を避け病を養ふには此地も亦經濟上屈竟の地なるべし、温泉塲より三十町舊城山の上に公園地

わり西麓に奈良井川を臨み西は眼界開けて南北安曇郡の高原を見晴し猶ほ筑摩郡の七八分を臨みて眺望稍や佳なり又淺間より九町字大村といふ處に女鳥羽の瀧あり甚だ大ならずと雖も水聲數町の外に聞ゆ此處は昔し淺間國司菅生王の居館ありし處にして今猶產土神として王の靈を祭れり、偖東京より此地に赴かんとするには中仙道鐵道の碓氷嶺を越に上田驛にて下車し茲より淺間まで十四里餘、馬車又は人力車に乘るべし人力車賃は一人曳一圓二十錢凡そ八時間にして達す但し途を保福寺峠の方に取れば二里餘近しと雖も峠は車を通ぜず（其途中田澤沓掛等の溫泉あり）又同鐵道の田中停車場より人力車にて鹿敎湯溫泉に赴き（里程五里人力車賃四十錢）同所より駕輿にて內村峠を越に淺間に到るも好し鹿敎より淺間まで四里半駕籠賃は一圓廿五錢なり

◉姨捨山

古今集に「我こゝろ慰めかねつ更科やをばすて山に照る月を見て」と詠みたる姨捨山は日本第一の觀月の勝區にして信濃國更級郡冠着山の北、千曲川の西、羽尾村の西に在り此地に赴かんとする者午前六時上野を發し高崎、横川、輕井澤等の各停車場を過れば午後二時阪城停車場に着す（上野より下等汽車賃一圓五十一錢）るを以て茲より人力車に乘り磯部、戸倉を經て千曲川の舟渡を渡り尙ほ行くを一里（坂城より二里餘、人力車賃十四錢）にして姨捨山に着す、山は甚だ高からずと雖も形ちは椀を伏せたるが如く綠樹翠草相交はりて淸趣掬すべし山中に長樂寺あり境內廣くして其上に滿月殿なるものを設く二間四面の草堂にして觀月の客概ね此堂に憩ひ以て月の昇るを俟つ、其傍らに奇巖あり高さ三十尺許幅五十尺許り之を姨石と稱し石に接近して有名なる桂の樹あり又長樂寺庫裡の方に當れる一室を月見堂と號し欄を設けて客の月を觀るに便す堂に上りて遠望すれば前には千曲の淸流を隔てゝ鏡臺山を仰ぎ仲秋空淸き夜名月

此の鏡臺山の巓さより昇る時の如きは絶景筆に盡すべくもあらず其影水田に映じて所謂田毎の月なるものを現ず、姨捨山の故事は物語りの書に傳へて人の知る所なれば茲に贅せず

◉善光寺

午前六時上野發の汽車にて高崎に向ひ高崎にて列車を乘換へて北行すれば午後三時長野町に着す(午前九時上野を發すれば午後六時長野に着す)長野町は善光寺の在る所にして古へは善光寺驛と稱せり地は信濃國の北端上水内郡に屬し北國街道に方り戸數五千一百、人口二萬六千二百、町内に長野縣廳、尋常中學校、師範學校、地方裁判所、監獄署、上水内郡役所、警察署、郵便電信局等あり、停車場より善光寺に至る道路を新町、諏訪町、大門町と稱し繁華なる大通りにして兩側に旅館及び商店櫛比し大門町の如きは殆ど旅店を以て充たさる、停車場より善光寺門前まで十町(人力車賃五錢)旅店の名あるものは大門町の對旭館(藤屋本店)五明館(扇屋金四郎)山屋、松井屋等にして停車場前には出張店あり

定額山善光寺は天智天皇三年甲子の草創にして昔しは天台宗なりしが後ち眞言宗となりて高野山に屬し又寛永年中東叡山に屬して再び天台宗に

歸す本尊は閻浮檀金の阿彌陀如來にして世に一光三尊佛と稱す、先づ本門より入れば正面に二王門あり桁行六間四尺三寳荒神、三面大黒天を安す其左に大本願あり紫衣の尼寺にして堂上の姫君之が住職たり、其右の側には末派の寺院建ち並び中央に釋迦堂あり世尊院に屬し天延年間越後多古ヶ濱より出現せしと云ふ涅槃の釋迦如來を安置す、仁王門の正面に三門あり二重の樓門にして高さ六丈六尺、桁行十一間、梁間四間二尺裡に文殊四天王を安す山門を入れば兩側には奉納の燈籠、諸神塚、山王塚、其左に經藏右に鐘樓あり、正面は即ち本堂にして南向き高さ十丈二重の屋根撞木造り、柱の數百三十六本、垂木の數六萬本餘、四方に階段を設けて賽人の昇降に便す、外陣に疊百疊を敷き參詣の貴賤此處にて禮拜す其の正面板敷の間に定香の臺ありて右に太鼓を置き左に花瓶を置き花瓶には常に松を挿し之を親鸞上人手活の松と云ふ、偖本尊阿彌陀如來は本堂西手なる庇の間に安置し厨司の四方に戸帳を垂る秘佛なるを以て開

扉の時と雖も其の尊体を見せしめず、寺記に據れば此の如來尊像は百濟國より遠く我邦に出現せしものしにて人皇三十四代推古天皇の御宇信濃國の住人本田善光なる者偶〻速波堀江の岸を過ぐる頃水中より光明を放ちて如來其姿を顯はし給ふ善光隨喜の餘り尊像を脊に負ひて生國信濃に歸り我家の臼の上に如來を安置して之を祭ること數年、靈驗益々顯著なれば皇極天皇の元年終に尊像を水内郡芋井の郷（今の長野町）に移して堂宇を建立す爾後本堂の火災に罹ること數回、元祿年間大に殿堂を修理す今の本堂即ち是なり云々、夫れど文明の世となりては三歳の童子さへ斯る無稽の事を信ぜず殊に本田善光など世にありもせぬ人を作り出し善光の文字に因みて附會の説を揑造せしは笑ふに堪たり（本田善光の事に就ては故近藤芳樹翁が「くぬがちの記」に於て委しく論じられたれど煩はしければ茲に引用せず）此外寺内には納骨堂、毘沙門堂、阿闍梨の池、法然上人舊跡、親鸞上人舊跡、聖德太子鏡の御影、御靈屋、攝待所等見るべ

きもの多し、攝待所より上一町許りの間を珠數屋町といひ左右に商店連なりて如來御影の掛物、數珠等を鬻ぐ其の繁華なること東京淺草の仲店の如し、毎歳舊暦三月十五日及び十月十五日の兩日會式を行ひ六月十三、十四の兩日また大法會を執行す是日市中には山車を曳出し萬燈を點じて踊り狂言を催し賽人群集して頗る賑へりと云ふ

◉戸隱山（戸隱神社）

戸隱山は長野町を距る西北四里二十町、善光寺の横手より直ちに賽路に入る其内新安村まで一里餘の内は羊腸たる九十九折にして嶮峻を極むるも殘り三里餘の間は稍や平夷にして難處なし、夫より行くこと一里ばかり飯綱山麓に至れば近傍の群峰は行人と高を均くし曠渺たる原野は一眸の中に收まるなど眺望頗る宜し、戸隱神社は縣社にして手力雄命を祀り孝元天皇の御字之を創建すと云ふ攝社二あり一を中社と云ひ一を實光社と

いふ中社には八意思兼命、寶光社には天表春命を祭る山は皆巖石より成り本社は其巖を切開きたる間に在りて仁王門より石階を登れば不動岩、獅子の窟、天狗の窟など稱する巨巖四方に屹立し老杉其めぐりに鬱茂して幽邃極まりなし本社は應神天皇の七年大に社殿を造營し爾來歷朝の御崇敬淺からず降りて永錄年間武田晴信は自筆の願文を捧げ當社修理の爲めに孔方五十緡を寄付し又後越の國守上杉景勝も祈願の爲め奥社及び攝社を改造す德川氏に至りて朱印地一千石を寄附せられしを以て當山の名天下に高く儼然たる一大舊社と稱せらる維新の際朱印地を減せられ一時は維持に苦しみしも去る明治廿年内務省より保存金四百圓を下賜せられ猶ほ同地方有志者は此の名所を保存する事に盡力中なれば社殿を永久に維持するを難からざるへしと云ふ、本社にては新暦五月十五日に春季祭を八月十五日に秋季祭を執行し是日賽する者頗る多し又山中に清涼館、避暑亭、信北館其他廿餘の旅亭あり過半は舊社家の業を轉ぜしも

のにて家屋孰れも壯麗、宿料は一泊廿五錢より卅五錢迄の間にあり、長野停車場より此地まで二人曳人力車賃は片道凡そ一圓五十錢、借馬賃は往復一圓内外なりと

◉湯田中温泉

湯田中温泉は長野より澁嶺を經て上州草津、澁川等に出る縣道に衝り直江津鐵道線の豊野停車場を距る東の方四里十町下高井郡の南部に在り此地は前に星川の清流、後に湯平の小丘を控へ東には笠嶽、岩菅等の山嶽重疊し西北は地勢稍や開濶遠く越後の黒姫、妙高諸山を望み近くは川中島の高原と連なる、温泉は天智天皇の御宇僧知由の發見に係り鹽類泉にして無色清澄入浴及び飲用に適す、天然の温度は華氏の百六十三度、浴槽にては適宜に水を交へ百度より百二十度迄の温度を保つ、總湯は町の上端に在りて二個の混浴泉より成り浴室は明治十八年の新築にして間口

五間、奥行六間、浴槽を四個に分ち微温より温熱に至るまで漸次其の温度を高め別に面部頭腦を冷すが爲めに冷水の瀧を設く、總湯の外に猶ほ鷲の湯、鶴の湯、綿の湯、千代の湯等　温泉涌口あり其の成分は殆ど總湯と同一にして僂麻質斯、貧血性、炎後の滲出物、腺病、皮膚病等に特効ありと云ふ、町の中央總湯近傍の家屋は大概温泉宿を營むものにして其數十餘軒、就中湯本五郎治、見崎屋善左衛門、中見崎屋龜之助、穀屋九左衛門、鶴屋喜一等最も名あり其の宿泊料は晝食を併せて一日上等五十錢、中等四十錢、並二十八錢、自炊の法に依れば薪炊掃洒の勞を取る湯女一人を雇ふの外廉價なる席料と夜具損料とを拂へば足れり、町内に郵便局、洋酒店、寫眞師等あり電信局は此地を距る一里餘（豊野より此地に來る途中）中野町に在りて通信また不便ならず、魚類は直江津より來り星川には鰍、山目等を産す、東京より此地に來り遊ばんとする者午前六時上野發の汽車に乗れば午後三時四十分豊野（下等瀛車賃一圓八十

錢）に着し夫より人力車を驅れば六時半には湯田中に着す、豊野より此地まで乗合馬車賃は二十八錢、人力車賃は四十錢、東京よりの瀛車賃と合するも二圓二十錢の上に出でず

◉澁温泉

湯田中の東隣に一の温泉場あり澁温泉といふ、湯田中と相距る僅かに六七町許りの村續きにして平穏村に屬し戸數人口共に湯田中に均しく其の地勢風景も亦彼れと優劣なし、温泉は無色透明なる鹽類泉にして其の成分温度共に能く湯田中と相似たり此地温泉宿の重立たるものは菱屋寅藏湯本喜四郎、金具屋平四郎、穀屋市左衛門、山本喜藤治、角屋利衛門等にして旅籠料は晝食共一日廿八錢より四十錢まで自炊の客には夜具料、食料、薪炭費等を合せて一人に付一週間金一圓より一圓五十錢迄を申受くと云ふ、温泉場の傍らに藥師堂あり神龜年間僧行基此の温泉を發見し

近隣に草蘆を營みて病を養ふの傍ら自ら藥師の尊像を刻みて之を安置す今の本尊即ち是なりと又此地より東南一里餘、草津街道より左折したる處に琵琶池あり周回十餘町に過ざるも一碧洋々として萬頃の水を湛へ以て扁舟を泛ぶるに宜しく以て釣を垂るゝに宜し其側らに含滿の瀑布あり直下二十六丈幅六間水聲滔々として遠く谺に響き水烟は凝りて霧となり宛がら白布を懸けたるが如く又潛龍の躍るが如く秋日四邊の楓樹蜀錦を織出せる時は殊に壯觀なり其他笠嶽の雪、大鹿山の月、星川の螢、榎澤の水鷄、湯川原の鈴蟲等は此地十景の内に數へらるゝものなり、豊野より澁温泉までの馬車賃三十錢人力車賃は四十五錢とす

地獄谷　村内字沓野組の東横湯川の上流に一奇泉あり地獄谷と云ひ又延命湯と云ふ、熱泉横湯川の上流岩石の一孔中より噴出するを高さ二丈餘其聲雷の如く時としては蒸氣上騰して濃霧となり朦朧として咫尺を辨ぜず其近傍熱雨を降らして近づく可からず是れ即ちガイザーの一種にして

伊豆熱海の大湯と類を同うするものなり「信濃奇勝錄」に曰ふ大地獄といへるは溪流の側らより噴出るなり水の増さる時は流水之に混和するゆゑに其勢ひ弱くして六尺ばかり吹上る旱にて水涸るゝ時は一丈餘も騰るなり又人あまたにて手を拍ちて騷ぐ時は水勢益々強く湧き出でゝ二丈も高く沸上り泉氣煙の如く立昇りて其音地に鳴ひゞきて凄ましき有樣なり云々、亦一奇觀と云ふべし

◉赤倉温泉

箱根日光の如きは都人士が避暑の地として第一に指を折る處なれば夏の日盛りには遊客雜沓して好き宿屋へ泊らんとするとも往々空室なしと斷らるゝ事あり縱しや一室を借得たりとも一人の女中は五組六組の客を引受け西に走り東に馳せて額の汗を拭ふべき遑もなき程なれば混雜に紛れて接對向に行屆かざる事もあるべし故にかゝる雜沓を避けて靜に消夏の

計を運らさんとするには縱令其道は遠くとも餘り世の人の爲めに識られざる閑雅幽邃の地を擇ぶに如かず斯る避暑客の御注文に應じ編者が第一に御紹介申すべき仙境は即ち此の赤倉温泉なり、赤倉は越後國中頸城郡字一本木新田に在りて直江津鐵道路線の田口停車場より西へ僅かに一里餘、東京よりは行程七十三里なれども上野發午前六時の滊車に乘れば午後七時過ぎには温泉場に達し且其旅費も下等ならば片道二圓の上に出でず、田口停車場より赤倉までの新道は能く車を通じ上り一人曳の賃金は十七錢より二十錢までの間なれども近道を歩けば其の時間は左のみ一人曳の徐々と登り行くものと變らず已にして赤倉に到ればコケラ葺の宿屋軒を並べ一見して新開の温泉場たるを知るに足る此地は背後に名高き妙高山を負ひ其右にあるを鉢山、左にあるを黑姫山といひ鑛泉は其麓赤倉山の岩石の間より湧出るものを取り樋にて内湯を導けり更に北に向へば遙かに直江津の海を隔てゝ正面に佐渡ヶ島の海中に浮び出たるが如き

を望み其右には米山の峠長く巒峰と連なれるを認め沖行く船の白帆は浪に浮ぶ千鳥かと疑はれ軌道を駛る蒸氣車は畔をつたふ蜈蚣かと怪しまる概ね此の景色は樓上樓下いづれの處よりも望み得べきが中にも香嶽樓にては浴場の硝子障子を隔てゝ浴を取り汗を洗ひつゝ自在に眺望し得らるゝなど他の温泉場の遠く及ばざる所なるべし、温泉宿は香嶽樓（此樓は先年賣物に出でしと聞きしが今は誰の所有なるや知らず）を第一等とし村越屋（村越忠次郎）高田屋（茂原市三郎）の二軒之に次ぎ其他南部屋、今町屋、藤屋、豆腐屋、和泉屋、新屋、大丸屋、清水屋、松屋、岩井屋等數軒の宿屋あれども藤屋以下は紳士貴婦人の宿するには如何あるべき唯だ近鄕の農夫などが來り泊するには適當の家なるべし香嶽樓の宿料定價は一日二十五錢以上五六十錢までにして一飯は八錢の定めなれば他の繁華なる温泉場に較ぶれば其價ひ貴とからず去とて食類は芋、太根の類のみにもあらず鮮魚は毎朝直江津より之を取寄せ鷄肉、雞卵、牛乳等にも事を欠かざ

露光量違いの為重複撮影

れども一體田舍の山奥に過されば手を叩けば珍味立どころに到ると云ふ程には便利ならず故に肉類を好む人は罐詰を携へ行くもよし酒に奢る人は葡萄酒シャンペインの類を持參するも可なり唯だ赤倉は閑靜なると景色よきとの二ツのみ取得なりと思ひ給はゝ間違ひは無からん、温泉は炭酸泉にして多量の格魯兒那篤留母、重炭酸加兒基、硫酸加兒基等を含み僂麻質斯、皮膚病、腫物、創傷、痔疾等に効能あり又近傍杖を曳くべき名所には乏しきも信州善光寺へは滊車にて日歸りに參詣し得べし」著者も筆先草臥れたれば是れにて案内の筆を擱く

改正 東海東山 讃岐内山陽 漫遊案内

大尾

吉沼時計

金銀時計類
寶石入指環類
掛置時計類
金銀縁眼鏡類

（戊ノ一）

弊店は御買受人の御便利と謀り左の至便なる方法を設けたり

○賣品交換規則

弊店賣品にして貴意に適せざる時は一週以内他品と無引交換すべし遠國は往復日數を加ふ
●一ヶ年以内一割引　●二ヶ年以内一割五分引
●三ヶ年以内二割引　●四ヶ年以内二割五分引
●五ヶ年以内三割引　●六ヶ年以内三割二分引
●以上一ヶ年毎二分増の事
●送金は東京郵便本局又は銀行爲替にて御振込被下候様奉願候

○遞信省令第八號送附手續

遠地の諸君は送金注文の危險を恐れ其需用を充すべき人往々有之候處愛に弊店は右等諸君に對し安全に其需用を充すの道を開き先づ文書を以て注文を賜はり弊店は小包を以て物品を遞送し小包到着郵便局に於て代金を引換物品受渡の良法に依り各位の御注文に應ず候間確實にして御信用に背くなきを御了知あらんを希望仕候

東京日本橋區兜町（電話濱花五百十番）
御用時計舗　吉沼又右衛門
同　區小網町四丁目　同支店

露光量違いの為重複撮影

れども一體田舍の山奥に過ざれば手を叩けば珍味立どころに到ると云ふ程には便利ならず故に肉類を好む人は罐詰を携へ行くもよし酒に奢る人は葡萄酒シャンペインの類を持參するも可なり唯だ赤倉は閑靜なると景色よきとの二ツのみ取得なりと思ひ給はゝ間違ひは無からん、温泉は炭酸泉にして多量の格魯兒那篤留ム、重炭酸加兒基、硫酸加兒基等を含み僂麻質斯、皮膚病、腫物、創傷、痔疾等に効能あり又近傍杖を曳くべき名所には乏しきも信州善光寺へは汽車にて日歸りに參詣し得べし」著者も筆先草臥れたれば是れにて案内の筆を擱く

改正東海東山畿内山陽漫遊案内

大尾

吉沼時計

（戊ノ一）

金銀時計類
寶石入指環類
掛置時計類
金銀緣眼鏡類

弊店は御買受人の御便利を謀り左の至便なる方法を設けたり

○賣品交換規則

弊店賣品にして貴意に適せざる時は一週以内他品と無引交換すべし遠國は往復日數を加ふ

●一年以内一割引　●二ヶ年以内一割五分引
●三ヶ年以内二割引　●四ヶ年以内二割五分引
●五ヶ年以内三割引　●六ヶ年以内三割二分引
●以上一ヶ年毎二分增の事
●送金は東京郵便本局又は銀行爲替にて御振込被下候樣奉願候

○遞信省令第八號送附手續

遠地の諸君は送金注文の危險を恐れ其需用を充すべ能はざる人往々有之候處爰に弊店は右等諸君に對して安全に其需用を充すの道を開き先づ文書を以て注文を賜はり弊店は小包を以て物品を遞送し小包到着郵便局に於て代金と引換物品受渡の良法に依り各位の御注文に應ず候間確實にして御信用に背くなきを御了知あらんを希望仕候

東京日本橋區兜町（電話浪花五百十番）
御用時計舗　吉沼又右衛門
同　區小網町四丁目　同支店

劉良効遠光無公告

腸胃病　貧血　子宮病　産後　産前産後の特効道

百中百

保證す

品數種は貴重なる良藥なり

本劑は精製にして上質にて製し多年患者に配合し

見よ!!!見よ

強壮血液補

ナンバー

價定

大中小瓶

金四拾錢　金六拾錢　金貳拾錢

一日分　一日分　一日分

方四百　方二百　方一百

匁　匁　匁

東京日本橋病院長醫學士岡本武次氏

癖ヲ用ヒシテ博信堂主人ハ其効能ヲ他ニ比スレバ其酒ノ如ク保証ヲ虚ニ帰スルナキヘ證ヲ実ニ帰スルヲキヘ効能ヲ実ニ帰スルヲキヘ効能ヲ以ハル著効家ニ以テ經驗ノ効力ヲ以テ臭ヒ處著及ビ明小兒ヲ奮配藥ニ明ナリ婦氣ナリナ兒ヲ奮配藥ニ明ナリ人ノ神ルノ神ニ成ク小兒ハ發經血ニ最ク又日ハ實育症血モレ兒ニ藥本實育症血モレ

ハれも添郵ベ効能下敷遊局便爲

價無申ニシ書度御目送京名替

呈にすて代進あ相は廿候送方料郵には小便は拂

——本舗——

地番壹目丁薈町馬傳南區橋京市京東

堂信博本山

全國諸新聞廣告取次

東京市京橋區尾張町二丁目

弘報堂

電話本局八百五十一番

博文館五大雜誌便利廣告取次所

東京市神田區末廣町壹番地

博報堂

全國新聞雜誌大勉强廣告取次所

（戊ノ四）

夏期愛讀書廣告

（戊ノ五）

帝國文庫

全五拾册

壹册紙數千百頁餘
洋裝背皮金文字入上製美本

正價 ●壹册金五拾錢 ●拾册金四圓六拾錢
●三拾册金拾參圓 ●全部五拾册金貳拾圓

運送注意 帝國文庫ハ一册ノ紙數一千頁以上ニシテ其目方二百匁以上ナルヲ以テ普通郵便ヨリハ小包郵便ノ方便利ナリ、小包郵税ハ一册ニ付拾里迄七錢百里迄拾貳錢ナリ

我が日本出版業の開けしより未曾有の大出版なる帝國文庫は、古來稗史小説中の最大著述なる、太閤記、八犬傳を始め數百千種を蒐集し、今や五拾卷を以て完成を告げ、未曾有の出版業全く終れり。全部皆な是れ古名家が、畢生の力を注げるもの、情緒纏綿、奇想超凡、一回之を手にすれば、書を措く能はざる妙味あらん。

帝國文庫全部目次

博文館校訂

眞書太閤記 全四册

附太閤朝鮮軍記……法橋玉山（原書參百八十四卷合本）

絶代の英傑豊公の事蹟を錄して、其恢濶の氣度豪邁の膽略、一藤吉より起りて太閤たるを見よ。

博文館校訂

源平盛衰記　全壹冊

（原書四拾八卷合本）

源平の興廢は最大の悲劇なり、風流豪奢消磨し、盡き英雄美人黄土に歸す、文の妙亦三嘆すべし。

博文館校訂

南總里見八犬傳　全三冊

（曲亭馬琴作……原書四拾八卷合本）

馬琴の不朽なるは八犬傳にあり、其沙翁スコットに駢肩するを得るは八犬傳にあり、八犬傳哉。

博文館校訂

東海道中膝栗毛　全壹冊

東海道中膝栗毛　金毘羅參詣膝栗毛
木曾街道膝栗毛　從水曾路膝栗毛
上州草津膝栗毛　善光寺路膝栗毛
溫泉道中膝栗毛　奥羽一覽道中膝栗毛

（十返舍一九作……原書六拾五卷合本）

膝栗毛の一書は實に一九の寫照に充つべし、滑稽突梯、洒落灑脫、噴飯すべく、絶倒喫驚すべし。

（戊ノ六）

博文館校訂

梅暦、春告鳥　（戊ノ七）　全壹冊

目次
春色惠の花
英對暖語
春色籬の梅
（爲永春水作……原書百〇五卷合本）

春色梅ごよみ
春色梅美婦禰
春の若草

江戸人情本元祖とは作者春水が梅暦に成功してより、自ら稱する所鏡花水月眞に人情を曲盡す。

博文館校訂

通俗三國志　全貳冊

（高井蘭山作……原書七拾五卷合本）

蜀の玄德、魏の曹操、吳の孫權、三傑各一方に割據して三國の大活劇茲に起る、快絶奇絶妙絶。

博文館校訂

三馬傑作集　全壹冊

目次
浮世風呂
四十八癖屋
船頭部屋
潮來婦誌
酩酊語
浮世床
言語機關
辰巳園
早替
狂言綺語
送麻神表
（原書四拾八卷合本）
古今百馬鹿
船人頭話
大千世界樂屋深
人心觀機關
素人狂言紋切形
傾城買談客物語

社會の半面を巧に洞看し摸寫する是れ三馬特絶の技、讀者笑禁せざるを共に又當時の世を見ん。

騒動實記　全壹冊

博文館校訂　柳澤、越後、黒田、加賀、伊達

目次（護國女太平記　金澤實記　越後記　伊達顯秘錄）

（寛永箱崎文庫大全　原書八拾卷合本）

所謂御家騒動中の著名なる者五種、憑虚紀實の中に齊家の箴を遇し、烘雲托月の妙亦茲に存す。

京傳傑作集　全壹冊

博文館校訂

目次（昔話稲妻表紙　忠臣水滸傳　京傳予誌　夜半の茶漬　本朝醉菩提　優曇華物語　仕懸文庫　志羅川夜船）

（雙蝶記　手段逼言　物娼妓絹篩　通言總籬　原書五拾四卷合本）

京傳は江戸時代大作家の一として、當時の小説を一變せり、其作諸體備はらざるなき亦可欽仰。

種彦傑作集　全壹冊

博文館校訂

目次（淺間嶽面影草紙　緑手摺昔木偶　阿波の鳴門　逢州執着譚　奇遇縁　正本製　勢田橋龍女の本池）

（原書參拾四卷合本）

措詞の俊雅にして意匠の惨憺たる、是れ種彦の特長の技、本編收むる所の諸作蓋し其粹中の粹。

星月夜鎌倉顯晦錄　全壹冊

博文館校訂

北條九代記　全壹冊

（高井蘭山作……原書四拾壹卷合本）

（戊ノ八）

顯晦錄は高井蘭山の編する所、蘭山の博學宏辭を以て鎌倉幕府の眞相を寫す波瀾起伏山高水長。鎌倉の執權を以て天下に號令するもの九世北條氏の事亦頗る見るべし、奸譎に起り暴に亡ぶ。

（戊ノ九）

通俗十二朝軍談　全壹冊

博文館校訂

通俗武王軍談　全壹冊

通俗明清軍談　全壹冊

（李下山人、清地以立、鈴成作……原書四拾參卷合本）

盤古氏以來殷紂に至るの十二朝其間實に虎騰龍騰の戰伐多し本書を繙かは支那太古史に通す。武王紂を討つ周の天下茲に起る本書は殷宋より周秦に至るの戰鬪攻伐を叙す讀去駭心動魄せむ。元滅びて朱明起り朱明亡びて滿清興る近く數百年前に係る國姓爺鄭成功の偉略尤も見るべし。

甲越軍記　全壹冊

博文館校訂

（速下春曉齋作……原書六拾卷合本）

甲斐の武田、越後の上杉、共に稀世の名將、謀臣猛將各雲の如く雨の如し、眞に絶代の奇觀。

博文館校訂

通俗吳越軍談

全壹冊

（池田東籬、夢梅軒章峰作……原書四拾五卷合本）

越王勾踐吳を敗て歸る臥薪嘗膽の苦節始て然るを得たる也策士雲の如く宮女花の如き亦可快。智を以て勝を制する是漢の高祖なり勇を以て勝を制する是楚の項羽驅鬼役神の大觀此裏に存す。

博文館校訂

楠廷尉秘鑑

全壹冊

（著者不詳……原書百參拾卷合本）

楠公正成の忠誠智謀三世に傳へて其名は則萬世に朽ちず。本書南北兩朝の終始を叙し得て詳悉。

博文館校訂

風來山人傑作集

全壹冊

目次

風來六々部集
流志道軒傳
神靈矢口渡
嫩葉相生源氏
平賀鳩溪實記

根南志具佐後編
ろし草
前太平記古跡鑑
田舍芝居
（原書六拾六卷合本）

根南志具佐後編
金の生木
弓勢智勇湊
驪山比翼塚

（戊ノ十）

風來山人は一個奇傑の士時を得ずして文墨に隱る、故に其嘲世罵俗の筆皮肉に徹して骨に泌す。

（戊ノ十一）

尾崎紅葉
大橋乙羽校訂

西鶴全集

（發賣禁止）

全二冊

目次

好色一代男
武道傳來記
好色五人女
胸算用
武家義理物語
置土產
日本永代藏

好色二代男
日本朝二十不孝
本朝櫻陰比事
萬の文反古
新可笑記
元祿太平記

好色一代女
男色大鑑
俗つれ〴〵
本朝町人鑑
諸國ばなし
好色三代男
（原書百拾九卷合本）

元祿の大作家西鶴翁の著漸く湮滅して世に傳らざる者多し今稀世の名作を輯めて此編を成す。

博文館校訂

滑稽傑作集

全二冊

目次

開卷觀百笑
舊忠臣藏變痴氣論帖……烏亭焉馬
箱枕夢輔譚論……感和亭鬼武
七傾城賈一筋道……式亭三馬
指面偏人……梅暮里谷峨……一筆庵主人
狂言田舍操……草……山東京傳……金鶏……梅亭……式亭三馬
箱根草……瀧亭鯉丈
面偏人……師孟……大山道中膝栗毛……十返舍一九
指……めぐり……十返舍一九
七……綺……式亭三馬
傾城賈……福……十返舍一九
魂……貧……世の中……十返舍一九
臣藏……だみ……六あみだ……十返舍一九
夢輔……言……合人……瀧亭鯉丈
變痴氣……論……日醉……十返舍一九
論帖……詣……人……瀧亭鯉丈
帖……笑……人……瀧亭鯉丈
舊……觀……百……花……暦……八笑人……
卷……百……笑……滑……稽……二日醉……
開……笑……烏……亭……焉……馬……花……暦……八笑人……
舊……觀……百……笑……烏……亭……焉……馬……花……暦……八笑人……
舊……觀……百……笑……烏……亭……焉……馬……花……暦……八笑人……
舊……觀……百……笑……烏……亭……焉……馬……花……暦……八笑人……

次

茶番樂屋……櫻川慈悲成
妙々痴談……三芝居士
返註……浮世名所圖繪……四娼主人
曾我物語……烏亭焉馬
評判……古の正夢……三芝居士
世の杜……三味撰……一筆庵主人
やぐら選……棟梁……振鷺亭
ぐる商……袋……唐洲……叶福助……黒白主人
俄……深川珍話……穿當……略縁記……白主人
幸慶子……酒徒……雅話……ゑい
未詳……（原書百參拾貳卷合本）

名教の中樂土あり滑稽の中何ぞ眞理なからん以て旺皮を捻るべく亦以て大悟徹底すべき也。

博文館校訂

其積自笑傑作集

全二冊

目次

浮世親仁氣質……國性爺明朝太平記
諸國物語……世間子息氣質
風流軍配團……世間娘氣質
御伽名代紙表……風流西海硯
鬼一法眼虎の卷……商人軍配團
傾城禁短氣……傾城歌三味線
傾城情の手枕……風流曲三味線
……咲分五人娘
……自笑樂日記
（原書九拾六卷合本）

八文字屋もの、江島其磧八文字舍自笑の傑作を集む、一種の妙文字蓋し方今晴難き者ならむ。

博文館校訂

人情本傑作集

全二冊

（戊ノ十二）

假名文章娘節用……曲山人
婦女今川……楚満山人
孝女二葉の錦……梅暮里谷峨人
由佳里の卷……爲永春水
當世虎の卷……田螺金魚
氷縁奇遇都の花……管垣琴彦
蔦蔓戀の花菱……平亭銀鶏
春色三題噺……春廼家幾久
戯聞鹽梅餘史……曲亭馬琴
娘太平記操之早引……曲山人

（原書百〇五卷合本）

清談若緣……曲山人
秋の二季種……三亭春馬
緣藤涙……十返舍一九
所春色戀志賀那美……爲永春水
寒春紅丑の日待……振鷺亭
辰巳清談海の春……爲永春水
花街寿々女……鼻山人
閑情……松亭金水
月夜三廼柳之横櫛……梅亭金鶏
仇競今樣櫛……紀山人

（原書百〇五卷合本）

（戊ノ十三）

春水以外に人情本の作者多し曲山人の小三金五郎の如き爲永と雖恐らくは及ばず本編に見よ。

博文館校訂

氣質全集

全一冊

目次

世間母親容氣……南圭梅嶺
世間妾形氣……和譯太郎
略縁起出家形氣……自笑風流茶人氣質……無跡山瓢
當世銀持氣質……永井堂亀友
世間姑氣質……永井堂亀友
世間仲人氣質……永井堂亀友
世間旦那氣質……永井堂亀友
當世宗匠氣質……永井堂亀友
世間御旗本容氣……舛
世間學者氣質……世間小兒養育氣質……大梁金陵
世間化物氣質……永井堂亀友
世間流茶人氣質……永井堂亀友
當世芝居氣質……永井堂亀友
笑談醫者氣質……永井堂亀友
當世……半井金
（原書七拾參合本）

氣質もの、一種西鶴八文字屋に起りて名家の傑作少らず本編精粹を抜きて十有餘種を集錄す。

博文館校訂

珍本全集

全三冊

目次

懷硯……井原西鶴
一夜船……北條團水
梅若丸一代記……自笑其磧
寛濶役者氣質……安藤自笑
鎌倉諸藝袖日記……自笑其磧
西山物語……建部綾足
赤烏帽子都氣質……永井堂龜友
諸道聽耳世間猿……和譯太郎
諸國落首咄……作者不詳
雨月物語……上田秋成
一夜船殘編……北條團水
棠大門屋敷……錦文流
近代艶隱者……井原西鶴
夕霧一代記……振鷺亭
兼好一代記……自笑其磧
岡釣話……岡山鳥
飛彈匠物語……六樹園
月宵鄗物語後談……桃華園
竺志船物語……村田春海
誰が身の上……自笑

名殘の友……井原西鶴
正月揃……北條團水
傾城色三味線……安藤自笑
熊谷女編笠……錦文流
風俗俳人氣質……兵作堂龜友
諸國武道容氣……作者不詳
近江縣物語……六樹園
本朝水滸傳……建部綾足
御前義經記……西澤一鳳
元祿曾我物語……都の錦
跖婦傳……山岡明阿彌
善惡身持扇……自笑其磧
野澤名物燒蛤……作者不詳
御伽百物語……白梅園鷺水
紅白源氏物語……梅嶺
國花諸士鑑……雲齋山人
月宵鄗物語……四方歌垣
武道眞砂日記……月尋堂
禁短氣……作者不詳
女房氣質異赤繩……式亭三馬

（原書百七十五卷合本）

湮晦して多く世に獲難きもの意匠の奇逸警拔なる者同意に千古に足る者皆珍として喜ぶべし。

博文館校訂

赤穗復讐全集

全一冊

（戊ノ十四）

（戊ノ十五）

目次

赤穗義士一夕話……山崎成美
狂歌忠臣藏當振舞……宿屋飯盛
長門本忠臣藏……石川六樹園
繪本忠臣藏……集議堂主人

忠義武道播磨石……作者不詳
俳諧忠臣藏……二九亭赤面
忠臣藏岡目評判……近松東南
正史實傳いろは文庫……爲永春水

（原書七十五卷合本）

赤穗四十七士の事蹟も角大和男兒の熱血至性を見るべきもの宜也錄する者多き傑作皆な集む。

博文館校訂

水滸傳

全二冊

（曲亭馬琴作……原書九拾卷合本）

水滸の一書は天下の奇搆也百八の豪傑鬼魅を促へ奸邪を斬り天下に横行して變幻測る可らず。

幸堂得知校訂

忠臣藏淨瑠璃集

全壹冊

目次

碁盤太平記……近松門左衛門
假名手本忠臣藏……竹田出雲
いろは歌義臣鑒……中村阿契
躾方武士鑑……近松半二
忠臣いろは實記……福内鬼外
忠臣境盟約大石……若竹笛躬
忠臣後日噺……北脇素宜

忠臣金短冊……並木宗輔
難波丸金鷄……中村阿契
太平記忠臣講釋……近松半二
いろは藏三組盃……近松半二
廓景色雪の茶會……梅野下風
忠臣一力祇園曙……芝屋芝叟

（原書百〇六卷合本）

近松門左以來忠臣藏の淨瑠璃を作るもの數十家篇什亦多らずとせず本編其妙中の妙を集めり。

博文館校訂

四大奇書

全二冊

目次

- 繪本西遊記……作者不詳
- 夢想兵衛和壯弓張月……曲亭馬琴
- 胡蝶物語……曲亭馬琴
- 座敷藝忠臣藏……山東京傳
- 伊呂波引寺入節用……柳亭種彦
- 女扇忠臣要……鶴屋南北
- 傾城播磨石……作者不詳

（原書百三卷合本）

いろは演義……鶴屋南北

弓張月、西遊記、夢想兵衛、和壯兵衛、快奇珍怪妙等の言以て之を悉すに足らず、本書を讀め。

博文館校訂

續氣質全集

全壹冊

目次

- 諸商人世帶氣質……江島屋其磧
- 寬濶大臣氣質……一世間長者氣質
- 當世貞女氣質……作者不詳
- 和國小姓氣質……麟洞夫婦氣質
- 俳優家蟲貢氣質……式亭三馬
- 長世間侍婢氣質……山東京傳
- 當世傾城氣質……蛙文臺
- 增舍大梁……自笑端笑

氣質全集先に既に發刊す然るに遺珠尚極て多く世人之を望む旱の雲に於けるが如し續篇出づ。

饗庭篁村校訂

近松時代淨瑠璃

全壹冊

（戊ノ十六）

目次

- 凱船陣……國性爺合戰
- 唐船噺今國性……國性爺後日合戰
- 大織冠……武常人磐男……孕大磯虎稚物語……源氏冷泉節盃
- 賀古教信七墓廻……文五……曾我五人兄弟……平家女護島……當流小栗判官……釜田兵衛名所……曾我……虎が磨……絶狩……釋迦如來誕生會……松風村雨東帶鑑……持統天皇歌軍法……（原書九拾參卷合本）……松平……紛本地……

（戊ノ十七）

近松門左衛門の稀世の名家たるはた其篇什に富める世既に之を知る、本編は時代物の粹を集む。

目次

- 雪女五板羽子板……大原問答青葉笛……大浦年代記……島……
- 大岡越前守出世の事……煙草屋喜八……越後傳吉……小間物屋彦兵衛……嘉津の國屋主税……お菊……

博文館校訂

大岡政談

全壹冊

目次

- 天井一……村……傾……後……小……水……
- 長坊一……城……藤……牛……西……呑……
- 庵一……瀬……川……四……郎……村……
- 助一……
- 直助……白子屋……
- 櫓……お熊……
- 兵衛……
- 畔倉重……
- 四郎……
- 松田……
- 雲……
- 切……
- 仁左衛門……
- 花……
- 原……
- 七十一……
- 卷合本）……

奉西久く既に裁判小説ありて行はる我政談の如き以て之に比するに足れり亦往々至理を見む。

博文館佛教校訂各宗

高僧實傳

全壹冊

目次
龍樹菩薩傳　天親菩薩傳
法然上人傳　善導大師傳
弘法大師行狀記　聖道元禪師行狀記
親鸞聖人一代記　慈惠大師一代記
祐天上人一代記　（原書四十六卷合本）

法德一代に卓絶せるもの學行萬世に傳ふべきもの或は紫衣或は雲水而して高僧たるや皆一也。

博文館校訂　馬琴傑作集　全壹冊

目次
俊寛僧都島物語　賴豪阿闍梨怪鼠傳
隅田川梅柳新書　松染情史秋七草
（原書五十九卷合本）

馬琴の筆大作短篇皆其妙を極む、本篇は短篇中特に傑出せるものを集む、曲亭の偉觀玆に存す。

博文館校訂　仇討小說集　全壹冊

目次
天下茶屋敵討眞傳記　二島英勇記
箱根山靈應傳　敵討孝女傳
（原書六十七卷合本）

復讐の事亦人類の一美性一快擧たり、法の禁ずる所と雖も其志や尙ぶべく其事蹟や奮勵すべし。

（戊ノ十八）

博文館校訂　淨瑠璃名作集　全壹冊

（戊ノ十九）

目次
菅原傳授手習鑑……竹田出雲
妹背山婦女庭訓……近松半二
關取千兩幟……近松半二
蘆屋道滿大內鑑……竹田出雲
本朝廿四孝……近松半二
ひらかな盛衰記……三好松洛
（原書七十二卷合本）

伊賀越道中双六……近松半二
太平記忠臣講釋……近松耕堂
御所櫻堀川夜討……文耕
義經千本櫻……竹田出雲
浦兒軍記……作者不詳
壇小野道風青柳硯……竹田出雲

門左以外に海音、宗輔、出雲、松洛等十數の名家あり各一の特長を有す、本編以て證とべし。

博文館校訂　俠客傳全集　全壹冊

目次
幡隨院長兵衛……著者不詳
國定忠次實記……著者不詳
神明强勇傳……著者不詳
髯の黑兵衛……感和亭鬼武
松前屋五郎兵衛……著者不詳
天竺水滸傳……瓢々舍千成
鼠小僧實記……著者不詳
奴の小ま……柳亭種彥
江戸紫三人同胞……柳亭種彥
（原書百七十七卷合本）

義勇の氣溢れて任俠の行となる名教以外其可憐、快絕奇矯の言動は以て懦夫を起すに足るべし。

博文館校訂

續仇討小說集　全壹冊

目次
（柳荒美談　敵討高田馬場　八月赤子娘敵討
實說名畫血達摩　三都勇劍傳　（原書十四卷合本）
仇討合邦辻　孝子嫩物語

十年一劍を磨し來り機熟して長蛇を屠る復仇の事蹟讀來神氣を旺すべし況や其傑作を集む者。

饗庭篁村校訂

近松世話淨瑠璃　全壹冊

目次

曾根崎心中　生玉心中　博多小女郎浪枕　心中刄は氷の朔日　丹波與作　夕霧阿波鳴渡　日本武尊吾妻鑑　室町千疊敷　嫗山姥　双生隅田川

壽の門松　槍の權三重帷子　五十年忌歌念佛　おふさ德兵衛重井筒　堀川波の鼓　傾城酒呑童子　聖德太子繪傳記　吉野忠信　門出八島　（原書六十九卷合本）

薩摩歌　心中萬年草　天の網島　淀鯉出世瀧德　冥途の飛脚　日本振袖始　源氏十二段長生島臺　最明寺殿百人上﨟　傾城反魂香

巢林子の作に於る時代物已に至巧世話物亦妙絕の作多し本編は則ち後者の傑出せる者を錄す。

- ●**桃太郎**　文學士坪內雄藏君序文　大和田建樹君唱歌　巖谷漣山人編　冨岡永洗密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**玉の井**　尾崎紅葉君序文　佐々木信綱君唱歌　巖谷漣山人編　小林永興密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**猿蟹合戰**　野口寧齋君題詩　戸川殘花君唱歌　巖谷漣山人編　村田丹陵密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**松山鏡**　饗庭篁村君序文　落合直文君唱歌　巖谷漣山人編　武內桂舟密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**花咲爺**　森田思軒君序文　湯淺吉郎君唱歌　巖谷漣山人編　水野年方密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**大江山**　川上眉山君序文　中村秋香君唱歌　巖谷漣山人編　歌川國松密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**俵藤太**　依田學海君序文　福羽美靜君唱歌　巖谷漣山人編　三島蕉窓密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**舌切雀**　幸田露伴君序文　鳥居忱君唱歌　巖谷漣山人編　寺崎廣業密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**かちかち山**　幸堂得知君序文　落合直文君唱歌　巖谷漣山人編　寺崎廣業密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢
- ●**瘤取り**　落合東郭君序文　物集高見君唱歌　巖谷漣山人編　山田敬仲密畫　全一冊　正價五錢　郵税貳錢

石橋思案君序文　黒川眞頼君唱歌　巖谷漣山人編　梶田半古密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

●物臭太郎　巖谷漣山人編　鈴木華村密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

志賀重昂君序文　小中村清矩君唱歌

●文福茶釜　巖谷漣山人編　尾形月耕密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

巖本善治君序文　飯田武郷君唱歌

●八頭の大蛇　巖谷漣山人編　高橋松亭密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

宮崎三昧君序文　小杉温邨君唱歌

●鬼ごと鮫　巖谷漣山人編　筒井年峰密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

遲塚麗水君序文　小中村義象君唱歌

●羅生門　巖谷漣山人編　久保田米僊密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

高橋五郎君序文　鳥好義君唱歌

●猿と海月　巖谷漣山人編　小堀鞆音密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

德富猪一郎君序文　諏訪忠元君唱歌

●安達ケ原　巖谷漣山人編　永峰秀湖畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

江見水蔭君序文　物集高見君唱歌

●浦島太郎　巖谷漣山人編　全一冊　郵正　税價　五貳錢

三宅雄次郎君序文　高崎正風君唱歌

●一寸法師　巖谷漣山人編　小林清親密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

元良勇次郎君序文　太田原千秋君唱歌

●金太郎　巖谷漣山人編　右田年英密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

福地櫻痴居士君序文　建部綾子君唱歌　巖谷漣山人編　永江玉桂密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

●雲雀山　巖谷漣山人編　淺井忠密畫　全一冊　郵正　税價　五貳錢

中川霞城君序文　增山正直君唱歌

●猫の艸紙　巖谷漣山人編　全一冊　郵正　税價　五貳錢

森鷗外君序文　巖谷漣山人著　武内桂舟密畫

●こがねの丸　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

尾崎紅葉君著　武内桂舟密畫

●二人むく助　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

江見水蔭君著　武内桂舟密畫

●今辨慶　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

野口珂北君序文　北村紫日君著　三傑肖像並ニ南州眞蹟入

●維新三傑　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

山田美妙齋君著　富岡永洗密畫

●雨の日ぐらし　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

川上眉山君著　武内桂舟密畫

●寶の山　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

幸田露伴君著　小林永興密畫

●二宮尊德翁　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

嵯峨の屋おむろ君著　富岡永洗密畫

●姉と弟　全一冊　郵正　税價　四拾貳錢

●當世少年氣質　巖谷漣山人君著　武内桂舟密畫　全一冊　郵正税價四貳錢

●親の恩盡雄暇人賢待吉康　宮崎三昧君著　小林永興密畫　村井弦齋君著　永野年方密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●紀文大石艮中休江聖村瑞甲子閻秀太郎德川家康　德富蘇峰君序文　原抱一庵主人著　藤島華密畫　巖谷漣山人著　武内桂舟、富岡永洗密畫　村井弦齋君著　富岡永洗密畫　高橋太華山人著　富岡永洗密畫　南新三君著　東歸坊補綴　富岡永洗密畫　高橋太華山人著　富岡永洗密畫　矢部五洲君著　藤島華僊密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

（戊ノ廿四）

●俠黑長兒　尾崎紅葉君著　武内桂舟密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●陸奥の少將　幸堂得知君著　富岡永洗密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●新太郎山陽公相人年孝内　高橋太華山人著　武内桂舟密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●賴山陽　三宅青軒君著　武内桂舟密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●上杉鷹山　大橋乙羽君著　幸崎廣業密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●菅丞相　遲塚麗水君著　村田丹陵密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●日蓮上人　幸田露伴君著　寺崎廣業密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●五少年　中村花瘦君著　島崎柳塢密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●二代忠源　武田仰天子著　小林永興密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

●平賀源内　水谷不倒生著　山田敬仲密畫　全一冊　郵正税價四拾貳錢

（戊ノ廿五）

村上浪六君著　三島蕉窓密畫
●高山彦九郎　全一冊　郵正税價四拾貳錢

石橋思案君著　武内桂舟密畫
●寧馨兒　全一冊　郵正税價四拾貳錢

江見水蔭君著　武内桂舟密畫
●加藤清正　全一冊　郵正税價四拾貳錢

宇田川文海君著　龜山一山密畫
●契沖阿闍梨　全一冊　郵正税價四拾貳錢

巖谷漣山人著　歌川國松密畫
●狂言新春駒　全一冊　郵正税價四拾貳錢

大川秋水君著　永峰秀湖密畫
●紀元節　全一冊　郵正税價四拾貳錢

高橋太華山人著　富岡永洗密畫
●子供のてがら　全一冊　郵正税價四拾貳錢

巖谷漣山人君著　水野年方密畫
●幻燈會　全一冊　郵正税價四拾貳錢

坂田霧山人纂譯　淺田一舟密畫
●春夏秋冬遊戯指南　全一冊　郵正税價四拾貳錢

江見水蔭君著　武内桂舟密畫
●幼年舞劍　全一冊　郵正税價四拾貳錢

（戊ノ廿六）

南新二君著　尾形月耕密畫
●福笑　全一冊　郵正税價四拾錢

松居松葉君著　水野年方密畫
●西洋滑稽落語　全一冊　郵正税價四拾錢

石橋思案君著　小林清親密畫
●小兒四十八癖船波ヲ烏軍り位　全一冊　郵正税價四拾錢

阪田霧山人著　小林永興密畫
●帆前船　全一冊　郵正税價四拾錢

泉鏡花君著　永峰秀湖密畫
●海戰の餘波　全一冊　郵正税價四拾錢

細川風谷君著　永峰秀湖密畫
●パノラマ　全一冊　郵正税價四拾錢

巖谷漣山人編　久保田米僊密畫
●八思烏　全一冊　郵正税價四拾錢

巖谷漣山人編　水野年方密畫
●田村將軍　全一冊　郵正税價四拾錢

巖谷漣山人編　梶田半古密畫
●玉取り　全一冊　郵正税價四拾錢

巖谷漣山人編　尾形月耕密畫
●源三位　全一冊　郵正税價二六錢

（戊ノ廿七）

●八幡太郎　巖谷漣人山編　筒井年峯密畫　全壹册　郵正價六錢
●武藏坊　巖谷漣山人編　右田年英密畫　全壹册　郵正價六錢
●一休和尚　巖谷漣山人編　鈴木華邨密畫　全壹册　郵正價六錢
●東宮照　巖谷漣山人編　小堀鞆音密畫　全壹册　郵正價六錢
●春夏秋冬　尾崎紅葉君外十四君合作　武内桂舟外十畫伯密畫　全二册　郵正價一册六錢五拾錢
●痘痕傳七郎　條野採菊山人著　水野年方密畫　全一册　郵正價六錢五拾錢
●幸堂滑稽談　幸堂得知君著　筒井年峰密畫　全壹册　郵正價六錢五拾錢
●福地櫻痴居士作　武内桂舟密畫　全壹册　郵正價六錢五拾錢
●福痴滑稽談　幸田露伴君著　富岡永洗密畫　全壹册　郵正價六參拾錢
●ひげ男　故樋口一葉女史著　女史肖像入　校訂　一葉女史　全壹册　郵正價八四拾錢

（戊ノ廿八）

野津大將、立見、大島、佐藤三少將及高田文學士序文　藤野房次郎君編
●平壤包圍攻擊　伊藤、坪井兩中將題字敵島大佐及田口卯吉君序文　平田骨仙君編　全貳册　郵正價壹册三拾五錢
●貴海大海戰　三宅青軒君著　三島蕉窓密畫　全貳册　郵正價一册五拾錢
●戰爭小說　江見水蔭君著　武内桂舟密畫　金鵄勳章　全一册　郵正價一册三拾錢
●戰爭小說　江見水蔭君著　水野年方密畫　雷艇砲的髮倖師士　全一册　郵正價一册六貳拾錢
●速射　饗庭篁村君著　武内桂舟密畫　全一册　郵正價一册六貳拾錢
●つり　森田思軒君譯　武内桂舟密畫　全一册　郵正價一册二拾錢
●間一髮　幸田露伴君著　武内桂舟密畫　全一册　郵正價一册二拾錢
●僥倖　内田不知庵君譯　武内桂舟密畫　全一册　郵正價一册二拾錢
●彫像師　福地櫻痴居士著　武内桂舟密畫　全一册　郵正價一册二拾錢
●忠孝義烈　武士　全一册　郵正價四拾錢

（戊ノ廿九）

幸堂得知君著　武内桂舟密畫
●天製糸瓜の水　全一冊　郵正税價二拾錢

依田學海君著　武内桂舟密畫
●小門　全一冊　郵正税價二拾錢

須藤南翠君著　武内桂舟密畫
●御正　全一冊　郵正税價二拾錢

江戸自漫齊藤緑雨君著　武内桂舟密畫
●男一蛙　全一冊　郵正税價二拾錢

塚原渋柿園君著　武内桂舟密畫
●あま告　全一冊　郵正税價二拾錢

山田美妙齊君著　武内桂舟密畫
●密し　全一冊　郵正税價二拾錢

遲塚麗水君著　武内桂舟密畫
●腕だめ　全一冊　郵正税價二拾錢

故若松しづ子君著　女史肖像入
●杜鵑一聲　全一冊　郵正税價二拾錢

森鷗思志軒君譯　小山正太郎密畫
●小公子　全一冊　郵正税價二拾錢

山岸藪鶯君譯
●十五少年　全一冊　郵正税價六廿五錢

●空中軍艦　全一冊　郵正税價六三拾錢

故矢部五洲君譯
●スタンレー探撿實記　全二冊　郵正税價一冊廿拾五錢

松居松葉君譯
●鈍機翁冒檢　全一冊　郵正税價八拾五錢

宮井安吉君譯
●大寶窟　全一冊　郵正税價八貳拾五錢

田山花袋君譯
●コサック兵　全一冊　郵正税價八拾五錢

幸田露伴君譯
●大氷海　全一冊　郵正税價六拾五錢

高橋雄峰君譯
●ロビンソンクルーソー絶島漂流記　全一冊　郵正税價參拾五錢

内田不知菴君譯
●めとを　全一冊　郵正税價六拾五錢

阪田霧山人君譯
●なまけもの　全一冊　郵正税價六拾五錢

谷田克德君譯
●夜と朝　全一冊　郵正税價六貳拾五錢

三遊亭圓朝君演　水野年方密畫
●名人長二　全一冊　郵正税價六貳拾錢

三遊亭圓朝君演　水野年方密畫
●蝦夷なまり　全一冊　郵正税價六貳拾五錢

三遊亭圓朝君演　水野年方密畫
●政談月の鏡　全一冊　郵正税價四拾五錢

三遊亭圓朝君演　水野年方密畫
●八景隅田川　全一冊　郵正税價四貳拾錢

桃川燕林君演　松本楓湖密畫
●佐倉宗五郎　全一冊　郵正税價六貳拾五錢

放牛舍桃林君演　三島蕉窓密畫
●天下の糸平　全一冊　郵正税價六貳拾五錢

福地櫻痴居士著　武内桂舟密畫
●日蓮記　全一冊　郵正税價六八錢

福地櫻痴居士著　武内桂舟密畫
●大久保彦左工門　全一冊　郵正税價四貳拾錢

福地櫻痴居士著　武内桂舟密畫
●尊王平野次郎　全一冊　郵正税價四拾五錢

美談
福地櫻痴居士著　富岡永洗密畫
●女楠　全一冊　郵正税價四拾五錢

福地櫻痴居士著　富岡永洗密畫
●十二時會稽曾我　全一冊　郵正税價四八錢

（戊ノ三十二）

福地櫻痴居士著　富岡永洗密畫
●東鑑拜賀　全一冊　郵正税價四八錢

福地櫻痴居士著　富岡永洗密畫
●關ケ原軍記　全一冊　郵正税價四八錢

（戊ノ三十三）

旅行案内

全壹冊　郵税六貳拾錢　正價洋裝

極彩色口繪…富岡永洗◉寫眞銅版畫…宮城二重橋…伊勢大神宮…日光神橋…日光陽明門…伊豆網代濱…奈良春日神社…木曾浴鶴巖…武州金澤瀨戸…豊後耶馬溪佛阪…紀州靜八丁…北海道蕈菜湖宇佐八幡宮…播州舞子濱…陸前松島…信州善光寺…陸前松島…上州妙義堂…富士白糸瀧…箱根塔ノ澤…上州榛名湖…伊豆熱海…江州三井寺…藝州宮島…駿州富士川橋…岩國錦帶橋…嵐山渡月橋…大阪道頓堀…興津清見寺…臺灣淡水河

本書は避暑旅行者は勿論、温泉巡遊者、山水吟詠者の須臾も座右を離すべからざる、重寶無二の奇書にして、山水の位置、名所舊跡の存在、旅行用心集など精細に記載しあれば、世の紳士淑女隨一の好伴侶なり

明治三十年七月一日印刷
明治三十年七月四日發行

定價金參拾八錢

著者　野崎左文

發行者　大橋新太郎
東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　熊田宜遜
東京神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所　熊田活版所
東京神田區錦町三丁目廿五番地

版權所有

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
博文館
電話本局　三百三番

（戊ノ三十四）

39.

71
1809 a

落